
いろいろな話を壊してみた

不知火

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

いろいろなお話を壊してみた

【Nコード】

N2339L

【作者名】

不知火

【あらすじ】

いろいろな作品をめちゃくちゃにしてみました。

そんなお話

鬱エンドもあります

遅筆かつ拙文です

あぐあいで寝てぶつこじやいんや(=3=)ノ

超団長編（前書き）

今回はあの超団長をヤンデレにしてみました。

ヤンデレ化は自身初の試みなので期待はしないでください……

超団長編

一体どうしてこうなったんだ……

俺は今、見知らぬ場所にいる。どこかの地下室にも思えるが、どうにせよ俺の知っている場所ではないことは確かだ

手には壁と鎖でつながっている鈍く黒い光を放っている枷のようなものがはめられていて、足にも同様に足枷がはめてある

目が覚めたらこの有様だ。帰宅した記憶がないから学校にいるうちか、或いは帰宅途中に気絶させられてここに運ばれたみたいだ

誘拐か……うちには金があるわけでもない。身代金はないところから絞るってか？

どうやら犯人はとてつもなく意地の悪い奴みたいだな

日本の優秀な警察に捕まってしまえ

「あ、起きたのねキョン。なかなか目を覚まさないから心配したわ

よ。」

音からそうとうな重量が伺える扉が開き、入ってきたのは……ハルヒだった

「ハルヒ！お前動けるのか！？……だったらこいつをどうにかしてくれ！」

ハルヒも俺と同じように誘拐されたい。だがコイツは動けるみたいだ。

助かった……

「鍵はないのか！？ないなら針金でもなんでも……」

「……分かってないみたいね。」

「折角あんたをコレで気絶させて運んだんだからみすみす解放なんてしないわよ。」

なっ！？犯人が……ハルヒ……？

ハルヒは持っているスタンガンのスイッチをいれて電流が流れることを確認し、ゆっくりと俺に近づいて来た

「お、おいハルヒ？冗談だろ！？」

ハルヒは俺の前に立ち止まると薄ら笑いを浮かべながらしゃがみ込んだ

「ねえキヨン？あんたは私のこと好き？愛してる？」

「な、何を言ってる……」

「私はあんたのこと愛してるわ。この世にあんたほど大事なものがないくらいに」

そう言ってるハルヒは俺の首の後ろに手を伸ばし、抱きついてきた

「証拠……見せてあげる。」

「おい！どうしたんだよハ……」

「キヨン……」

あるときとは違って今度はハルヒからのキス

やわらかい……なんて言ってる場合じゃねえな。明らかに様子が変わる

「ねえキヨン。あんたも私を愛してるでしょ？言葉に表して欲しいな。」

唇を名残惜しそうに離れたハルヒは猫なで声で話しかけてくる

今でも信じられない。今にもカメラを回した小泉が扉を開けて入ってくるんじゃないかと思う

「なあハルヒ。ここはどこなんだ？お前の家の地下室かなんか？」

「……………」

ハルヒ……

「なあそろそろこれはずしてくれないか？腹減ったよ。家に帰りたいんだが」

「……………」

嘘だって、ドッキリだって言ってくれよ

「あゝあ朝比奈さんの淹れてくれたお茶が無性に飲みたい。」

「……………」

「ん？なんだハル……」

「どうして私のこと愛してるって言うてくれないの！？ねえなんで！？答えなさいよ！！」

いきなり大声を出し、俺の襟を掴むハルヒの顔は今まで見たことがないくらいに苛立っていた

「口を開けばみくるちゃんみくるちゃんみくるちゃん……そればかりじゃない……………」

「あんなノロマのどこがいいって言うのよ！！」

「私はあんたを愛してるのよ！？あんたも私を愛してるでしょ！？」

襟を掴む力が次第に強くなっていく……………まずい……………息が……………

「ハ、……ハル……」

「言え！―言いなさいよ！―言えって言うてんのよ！―」

「……ぐ……が……あ……」

ビリッ

「がはっ、はあはあ……」

襟が破れたおかげで助かった……制服の襟がもつと丈夫だったら俺は……

「……まあいいわ。あんたもすぐに素直になる。」

「あんたはもう私以外と出会うことはないんだからね」

そう言い残しハルヒは笑いながら出て行ってしまった

怖い。ハルヒが怖い。一体なにがどうなってしまったんだ……俺の知っている涼宮ハルヒはどこへいったんだ

長門……小泉でも誰でもいい……誰か……誰か助けてくれ……「はい。あーん……おいしい？キョン？」

あれからどれだけ経ったのだろう。それすらも分からない

30分しか経っていないかもしれないし、一年くらい経ったのかもしれない

枷がはずされるのはハルヒが俺の体を濡れたタオルで拭くときだけ
以前逃げだそうと試みたがスタンガンで一撃……目覚めた後のこと
は……思い出したくもない

俺は未だにつながれたままだ。……もう助けなんて来ない……俺は
このままずっとハルヒと……

自然と笑みがこぼれる。自分でも分かる。これはひどくいびつで壊
れた笑みだ

「ちよつと聞いているの？無視するな！！」

……それでもいい……もうどうでもいい……

「なあハルヒ……」

「なに？」

「愛してる。」

俺はハルヒと三度目の口づけを交わした

少年はまるで発狂してしまったかのように叫び、美琴に詰め寄り全力でその拳を振るった

だが御坂は床に倒れながらもうつとりと恍惚の表情を浮かべながら少年を見つめている

その姿に少年 上条当麻は更なる恐怖を覚え、その場に崩れる

「痛いよ当麻、でもこれがあなたの愛情表現なのよね……」

目の前で崩れた上条を一度優しく撫でた後、美琴はゆらりと立ち上がり、肩にさげていた鞆から一般的な物よりも明らかに大きなスタンガンを取り出した

「私の愛も受け取って……」

その美琴の姿を見た上条は逃げるように後ずさりをする

「やめ……やめろ……」

しかし美琴は未だ恍惚とした表情でゆっくりと上条に近づく

そして上条が壁際にたどり着いたところで捕え、スタンガンのスライツチを入れると上条の右手に押し当てた

「ぐがああああああああああああああー!!」

とてつもない激痛が上条を襲う。しかし彼は気を失わない。

気を失えない。

あまりの激痛に気を失ったとしてもそのコンマ数秒後には痛みで目が覚めてしまうのだ

抜け出せない痛みだけの地獄を与えて美琴は満面の笑みを浮かべる

「どう？このスタンガンは特注品なの。私の全力の三分の二の威力なんだ」

高かったんだよ？と美琴は上条に笑いかけながらゆっくりと地獄から上条を解放した

「ねえ当麻、今度一緒に買い物に行こうよ。」

美琴は上条に寄り添い優しい口調で話す

しかし上条は目に生気が宿っておらず、美琴の言葉に一切反応しない
そんな上条に業を煮やした美琴は再び鞆を漁り、今度は携帯電話を
取り出し

「一緒に行ってくれたら……会わせてあげるよ?」

そう言って携帯の画面を上条に見せた

すると上条の体は再び恐怖に震え上がる

映し出されるのは真っ赤な部屋の画像

学園都市のどこかのマンションの一角と思われる部屋の壁は清潔感
のある白ではなく、鮮血で赤く染まっている

しかし上条は床に転がる何かに最も恐怖し、涙を流す

「イン……デックス……」

名前を呟くもその少女はすでにこの世にいない

画像の少女の肢体は真つ二つになり、絶命している

「会いたいでしょ？もう死んでるけどね。」

美琴が笑いかけると上条は震えながらボソボソと祈るように呟く

「守ってやれなくてごめん……ごめん……ごめん……」

そんな上条を見て美琴はうつとりと笑みをこぼす

「泣く当麻も素敵……」

「じゃ、また明日来るからね。明日は買い物に行こうね。」

上条は美琴が去った後も震えていた

「どうこの服？似合う？」

美琴は折角のデートだからどれにするか迷っちゃってと付け加える

しかしベンチに腰掛ける上条はなににも答えない

この日も部屋に閉じこもっていた上条は美琴に無理矢理連れ出された

美琴は動こうとしなかった上条の爪を専用の器具で剥がしていき、
ついに3枚目を剥がされたところで上条は美琴に従った

ちなみに剥がした爪は美琴が愛しそうに鞆へとしまっていた

「ねえ当麻、私は本当にあなたのことを愛してるの。誰よりも愛してる……」

美琴は誰もいない裏路地で上条に言い、口づけを交わす

「私と付き合って。」

上条は答えない。すでに美琴の用意した薬で眠っているからだ

そして無言を肯定とする美琴は嬉しそうに微笑む

「帰ろっか当麻。」

美琴は通りに出てタクシーを拾い、上条の自宅に向かった

美琴はいつも通りに上条の部屋に上がり込んでいた

美琴の言葉に何も答えない上条もいつもと変わらない

だがいきなり扉が開く音が響き、イレギュラーな出来事が起こった

「お姉さま、やはりここでしたか……」

白井黒子は自身の能力のテレポートで美琴の後ろに回ると薬品を打ち込み、美琴の意識を奪った

「あなたも眠りなさい。」

白井は上条にも同じ薬品を打ち込んだ

二人の意識は闇に落ち、白井は不敵に笑った

風紀委員編（前書き）

前話とリンクさせてみました（・ω・）

今回のテーマは

『^グゲシユタルト崩壊』です（^ω^；）

風紀委員編

御坂美琴お姉さま

私の女神。私だけの女神……

そう思っていましたのに……

「じゃあ黒子行ってくるわねー」

そう軽快に言って部屋を出ていくお姉さまの表情は晴れ晴れとしている

またあの汚らわしい類人猿とお会いになるのでしょうか……

私はお姉さまのことをこんなにもお慕い申し上げているのに……どうしてなのですか？

「……あ？何だデメエは？」

「私は……風紀委員ですの。」

お姉さまが私に振り向いて下さらないから……今日も無駄な血が流れるんですよ？

かわいそうな無能力者……能力を得ることができなかった故に私のストレス解消の玩具にされて……

「やめ……やめろ……頼む！やめてく」

また一人死んだ。

「それでね！アイツったら……」

怒った表情も素敵ですわお姉さま……

でもその怒りは好意の裏返し、私には向かないそのお顔……

ああ……お姉さまの好意を受ける虫がうらやましくなってしまう……

お姉さま申し訳ありません……お話の途中ですが、私もう耐え切れません……

少し出かけてきますね……

また一人死んだ。

「ねえねえ黒子、どっちの服がいいと思う？」

ああ、麗しやお姉さまどちらのお召し物もこの世のものとは思えないほどにお似合いですわ……

ですが、その素敵なお姿でコミとデートなんて本当に許せませんわ……

「じゃあ行ってくるわね。」

いつてらっしゃいませお姉さま。私もすぐに出かけますが……

今日は三人死んだ。

「実はね……私アイツと付き合うことになったの……」

……どうしてっ……どうしてなのですかお姉さま……

「やめてえ！！やめてよ黒子お！！」

薬によって一時的とはいえその強大な力を封じられ、己の無力を泣き叫ぶお姉さまもまた……

ああっゾクゾクしてしまいますわ……

ですが、愉悅に浸るのは後に致しましょう

まずはこの汚らしい猿めをこの世から消し去ってしまわなければなりません

哀れな猿ですこと……手足の自由を奪われ、言葉を発することができなくなり、己で世界を見ることができなくされた……

滴る真つ赤な血はあなたの罪の証

私からお姉さまを奪った罪の一部

ですが私も鬼ではありません。そろそろ終わりにしてあげましょう

……

見ていて下さいお姉さま。今からこの猿の呪縛からお姉さまを解き放って差し上げますから……

触れることにすら嫌悪感で吐き氣がしますが、せめてもの手向けで

す、地上100メートルのこの屋上から紐無しバンジーで終わりに
しましょう

見ていて下さいな……お姉さま

……上条当麻、何故笑っている？汚らわしい……死ね。

ほら見て下さいあの肉の塊を……さぁお姉さま、手足の拘束はもう
とって差し上げますから……

お、お姉さま？

どうしてその美しいお声で私にお言葉を下さらないのですか？

お姉さま……舌を噛み切るだなんて……どうしてそのようなことを……？

ああ…… お姉さまお姉さまお姉さまお姉さまお姉さまお姉
さまお姉さまお姉さまお姉さまお姉さまお姉さまお姉さま
お姉さまお姉さまお姉さまお姉さまお姉さまお姉さまお姉
さまお姉さまお姉さまお姉さまお姉さまお姉さまお姉さま
お姉さまお姉さまお姉さまお姉さまお姉さまお姉さまお姉
さまお姉さまお姉さまお姉さまお姉さまお姉さまお姉さま
お姉さまお姉さまお姉さまお姉さまお姉さまお姉さまお姉
さまお姉さまお姉さまお姉さまお姉さまお姉さまお姉さま

お姉さまお姉さまお姉さまお姉さまお姉さまお姉さまお姉さま
さまお姉さまお姉さまお姉さまお姉さまお姉さまお姉さまお姉さま
お姉さまお姉さまお姉さまお姉さまお姉さまお姉さまお姉さまお姉さま
さまお姉さまお姉さまお姉さまお姉さまお姉さまお姉さまお姉さま
お姉さまお姉さまお姉さまお姉さまお姉さまお姉さまお姉さまお姉さま
さまお姉さまお姉さまお姉さまお姉さまお姉さまお姉さまお姉さま
お姉さまお姉さまお姉さまお姉さまお姉さまお姉さまお姉さまお姉さま
さまお姉さまお姉さまお姉さまお姉さまお姉さまお姉さまお姉さま

黒子もすぐに参ります……たとえこの世でなくともお供いたしますわ

ね？お姉さま……

小さな生徒会長編

「愛とは何物にも代え難いもののよ。」

少女は満面の笑みを浮かべて椅子にだらりと座っている少年の顔をのぞきこむ

「大好き。あいらぶゅーだよ杉崎。」

桜野くりむは少年、杉崎鍵に楽しそうに話しかける

二人が居るのは杉崎鍵の家

くりむは現在居候という形で住み着いている

しかしくりむ自身は杉崎の妻であるつもりなのだ

一つ屋根の下で健全に寝食を共にし、ゆったりと時を過ごす。くりむはそんな幸せを満喫していた

「今日のご飯もおいしくできたよ」

くりむはテーブルに次々と皿を並べていった

「さ、召し上がれ。」

「ねえ杉崎？明日は何しよつか？」

食事を終えたくりむは柔らかに杉崎に問いかけた

杉崎の前には依然としてくりむの作った料理が並んでおり、温かだった料理は熱が消え去って冷えたものに変わってしまっている

「私は杉崎と一緒に何をしていたって幸せなんだ」

そう言ったくりむは再び杉崎の唇に自身の唇をそつと重ねる

そして少し経ってから跳ねるように離れると、名残惜しそうな表情を浮かべた

「明日も……いっぱいキスしてね。」

そういうくりむの笑みはさながら天使とも表現しうるものだった

「じゃ、先に寝るね。おやすみ杉崎。」

地に堕ちた天使は未だに笑みを浮かべたままでそう言ってその場を後にした

数日後、近隣の住民からの通報で杉崎宅に警察が踏み込んだ

入ったその瞬間から警察官の鼻に腐臭のようなものが届く、その臭いの元は少年の遺体だった

その少年の名は杉崎鍵、リビングで椅子に座っている状態で発見された

一人の警察官がその少年に近づこうとすると死角から腹部を刺され、その足を止めた

「私の杉崎に近寄らないで……」

怒りに満ち、憎しみのこもった表情でくりむは警察官の腹部から荒々しくナイフを抜き取る

痛みから警察官の一人はその場に倒れ込み、残った警察官は即座に拳銃や警棒を構えて臨戦態勢をとる

「私の杉崎に近づくなあああああああ！……！」

荒れ狂う天使はその鋭い牙を露わにして警察官たちに襲いかかった

「…………杉崎…………早く会いたいよ…………杉崎…………杉崎い…………」

桜野くりむは現行犯逮捕され、現在取り調べを受けている

だが警察官の言葉にくりむが耳を傾けることはなく、ただひたすらに愛しい少年の名前を呼び続けている

取り調べを行っていた警察官は仕方がなく自分よりも腕のあるベテランと交代するべく席を立った

「今すぐ…………会いに行くね…………」

一人になったくりむは力なく自分の喉元に両手を、その指先の鋭く尖った爪を当てた

「す……ぎ……きい……」

くりむの喉元の肉が引き裂かれ、血が溢れ出した

数ヶ月前

「あれ？会長。こんな時間にどうかしたんですか？」

夕食を食べ終えてくつろいでいた杉崎は突然の訪問者に驚いた

その訪問者は桜野くりむ。彼の通う高校の生徒会長だった

「まあ、外は冷えますからとりあえずあがってください。」

別に襲ったりはしませんから。と付け加えて杉崎は笑いながらくりむを迎え入れた

「杉崎、話があるの……」

テーブルにお茶を並べる杉崎に向けてくりむはこの日初めて口を開いた

重々しい口調に戸惑いながらも杉崎は椅子に腰を下ろした

「話ってなんですか？」

杉崎の言葉にくりむはいきなり立ち上がり、そばに詰め寄って優しく頬に口づけをした

「かつ！ かかかか、会長！？」

「私、杉崎のことが好き。」

慌てふためき椅子ごと倒れてしまった杉崎に対し、くりむは穏やか

な口調で話す

「私に笑いかけてくれる杉崎が好き。」

「私の頭をなでてくれる杉崎が好き。」

「とにかく私は杉崎が大好き。」

杉崎は虚を突かれたという状態で倒れたまま固まっているが、対するくりむは杉崎に覆い被さるような体勢をとって構わず続ける

「でも知弦にデレデレする杉崎は嫌い。」

「深夏と仲良く話をする杉崎も嫌い。」

「真冬ちゃんと親しげに笑いあう杉崎も嫌い。」

「私以外の女と一緒にいる杉崎が大嫌い。」

先程とはまったく違う憎しみのこもった口調で話すくりむにさらに杉崎は戸惑う

「あの……会長？」

「杉崎は私以外の女と一緒に居ちゃだめなんだよ……だから……」

ドスツという音が部屋に響き、同時に杉崎の腹部からは血が流れ出す

「……………えっ……………？」

「私だけのものになってよ……………」

くりむの握るナイフに塗られていた毒で気を失ってしまった杉崎はそのまま為す術もなく、数十分後出血多量で命を落とした

冷たくなった杉崎のすぐそばに寄り添うように寝転がるくりむは満面の笑みで語りかけた

「これからはずっと一緒に居ようね……………ね？杉崎……………」

小さな生徒会長編（後書き）

元ネタの面影がほぼないですね（＾ω＾；）

美麗書記編（前書き）

急遽生徒会メンバー全員分やってみることにしました

やるからには頑張りますが……スローペースに拍車がかかるかも（
^ω^；）

美麗書記編

「ち、知弦さん……」

「なに？キー君。」

随分と憔悴してしまった表情にも関わらず私に向かって鋭い視線を向けるキー君こと 杉崎鍵

今や彼はもう私のモノ

そして私は彼のモノ

もう絶対に彼を離さない。そして何があっても離れたりしない

ああ……愛しすぎてオカシクなってしまうそう……

彼を独占できる。こんなにも幸せなことがこの世にあるだろうか

私が彼への想いに気がついたきっかけはほんの些細なこと。ただのいつもと何一つ変わらない日常の中での出来事だった

生徒会で雑談をしているうちに彼の笑顔が不意に目に入った

その笑顔も見慣れていたはずだった。……でもそのときのそれはいつもとは違う印象を私に与えた

ただ単純に彼が素敵だと、彼の笑顔を独り占めにしたいと思った

それからというものの私の目は彼以外の世界のすべてを霞がかったように見せた

そして日に日に彼への想いは私の中で大きくなっていった。それと比例するようにして彼が私以外の誰かと会話していることが、私の目の届かないところで生活していることが許せなくなっていた

私はこんなにも想い焦がれて彼のことだけを考えているのに、彼は私以外のことを考えている

素敵で美しい彼を私だけのモノにしたい。

私だけのモノにしてみせる……

放課後の生徒会室、今日の活動も終わってそれぞれが帰宅の準備をしている中で私は意を決して彼に話しかけた

「キー君。大事な話があるから後で校舎裏まで来てくれるかしら？」

「校舎裏ですか？かまいませんが……」

少し不思議がつているものの優しい彼は私からの申し出を断らない

……これで準備は整った。後は実行に移すだけ

指定した約束の時間よりも十分前には到着しているキー君

気づかれないように背後から忍び寄って、私はそつと律儀な彼を抱きしめた

「……キー君好き……」

「え！？ち、知弦さん！どうしたんですか！？」

慌てふためく彼に気づかれないように私はそつと手に持っていたハンカチで彼の鼻と口を塞いだ

最初は驚きからか彼は少し暴れて抵抗してみせたが、やはりクロロホルムの力に人は逆らえない

彼の力が抜けていくのを感じた私は手配していた車に乗せて家へと連れて帰った

……ようやく手に

入れた。

「知弦さん、どうしてこんなことを……?」

拘束されているとはいえ、私の部屋までやってきた彼は未だに私の想いに気がついていないようだ

早く、早くこの想いにきづいてもらわなければ……

「んっ……はぁ……」

私はもっとも単純な愛情の示し方を彼に実行した

動けない彼の唇を強引に奪い、舌で彼の口内を蹂躪する

すると絡みつくようにしてとろけるような甘美な味わいが私の中に広がる。同時に彼も同じ快楽を味わっているだろう

ああ……タマラナイ

「ぷはぁっ!はぁ……はぁ……」

「これで分かったでしょキー君。私の気持ちに……」

「どうしてこんなことするんですか？知弦さん……」

……え？

「もうこんなことはやめてください。悪ふざけが過ぎますよ……」

……何故？

「俺が好きな知弦さんはこんなことしない。」

……ドウシテ？

「今の知弦さんは……」

ヤメロヤメロヤメロヤメロヤメロヤメロヤメロヤメロヤメロ
ヤメロヤメロヤメロヤメロヤメロヤメロヤメロヤメロ

「好きじゃ……ないです。」

違う！そうじゃない！

私が聞きたいのはそんな言葉じゃない！！

「キー君……悪い冗談はやめて……」

自然と私の目からは涙がこぼれ始めていた

嫌。

嫌だ。

嫌われたくない。

「いやあああああああああああ！……！！」

嘘ではないと訴える彼の目は冷たく、ほんの数日前まで私に向けられていた好意が微塵も感じられない

こんなはずじゃないわ……

私と彼は互いに愛し合っているはず!!

愛し合う二人は結ばれるのが当然でしょ!?

そうか……彼はアイツらに毒されて変わってしまったのね……

私以外と言葉を交わすうちに毒されてしまっていたんだ……

助けなきゃ……

私が助けなきゃ……

「待っててねキー君。すぐに助けてあげるから……」

私は小走りで台所へと向かい、手頃な包丁を手取る

「少し痛むかもしれないけど……我慢してね？」

彼の温かい血液に包まれて私は恍惚としていた。彼のすべては完全に私のモノになったんだ……

幸せ……

熱血副会長編

「なあ鍵？」

「……何だよ？」

あまりにそっけない返事ではあるけれど久しぶりにコイツの声を聞いた気がする

嬉しすぎて発狂しそうだ……

三時間名前を呼び続けた甲斐があつたな

「腹減つただろ？私が腕によりをかけてお前の好きなもの作ってるよ。」

「……いらねえ。」

「そんなこと言つなよお……」

やっぱり私に対して冷たい態度をとる恋人の 杉崎鍵

高校時代はあんなにも私のことが好きだと言っていたのに今では嫌われている気さえする……

私の想いとは裏腹に彼の心は私から離れていった。どうしてこんな関係になってしまったんだろう？

彼とは高校を卒業を期に交際し始めて一年を経て、私の引っ越し先の近くに小さなアパート借りて同棲にまで発展した

ちなみに同棲を始めてからはデートに出かけたことは一度もない

鍵が外に出ないからだ

……まあ、入居当日に手錠と足枷で拘束したんだから外に出られないのは当たり前なんだけどな

「じゃあさ鍵、夕飯の代わりにキスしてやるっか？」

「……………」

まただ……

「なあつて。なあ聞いてんのか？」

また私の言葉に耳を傾けなくなった。だんだんと私の中にドス黒い感情が募っていくのが分かる

またアレが来る……

あの衝動が……抑えきれなくなっている

「……………いいかげんにしろよテメエ!!」

「がっ!!」

「人の話を、聞けつて、いつも、言っただろうがああ!!」

「ぐっ……………ああ……………」

……………あ、ああっ！

またやってしまった……

「ち、違っんだよ……………鍵。違っんだ……………」

五発も……殴ってしまった……

怒りで衝動を抑えられなくなってしまった私は必ずと言っていいほど彼に傷を負わせてしまう

その際に振るわれる拳は高校時代に振るっていたじゃれ合うようなものとは違う。憎しみのこもった本気の拳

彼の体にはいくつか消えない痕も残っているかもしれない……

きつと……痛かったに違いない……

鍵ごめん……

ごめんなさい……

ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
ごめんなさい

「……お願いだ。私を嫌いにならないでくれ……私どんなことでも
するから……お願いだ……鍵……」

不安に押しつぶされそうになる私は身勝手にも彼の胸にすがりついた
私の目からこぼれた涙が鍵の服を濡らしていく

「許して……鍵……」

結局鍵はその後、私に言葉をかけてはくれなかった

数日後、私は夕飯の食材の買い出しに出かけていた

「ただいまー鍵。」

だが、そこにいたのは鍵ではなかった

「……お、お姉ちゃん……」

私の妹 椎名真冬 が訪ねてきていた。姉妹だからといって合鍵を渡していたのが失敗だった……

……気づかれてしま……

鍵がない!!

「おいっ！私の鍵をどこに隠したんだ！？真冬!!」

未だかつてないくらいに激情に任せて私は真冬の胸ぐらを掴んでいた

いくら妹だからって鍵を奪おうとするなんて絶対に許せねえ!!

「答える真冬!! 鍵をどこに隠しやがった！あぁっ!？」

ビリッ！

音を立てて裂けた服に支えられていた真冬の肢体は重力に逆らわず
床に叩きつけられた

痛みからせき込む真冬だが、すでにコレは憎むべき対象だ。どうな
ろうと知ったことか

「……先輩は私を見たとき助けてくれって言ったんです。」

床に不様に転がっている真冬が顔を歪めながら口を開いた

「聞けばお姉ちゃんは杉崎先輩にヒドいことばかりしてるらしいじゃないですか。」

真冬はよろめきながらも立ち上がり、私を鋭く憎しみを持って睨みつけた

「お姉ちゃんだったから私は身を引いたのに……」

「もう先輩に近づかないで！これからは私が……」

振るった拳が真冬の体を吹き飛ばし、真冬が激突した壁の一部が音を立てて崩れた

血を吐き、倒れた真冬に詰め寄って追い打ちをかけるように私は拳を振るい続けた

真冬の口は動き、何かを伝えようとしていたが……

ナニモキコエナイ

気がついた時には目の前に紅い肉塊が転がっていた

ドンッ

「あっ！すみません。大丈夫ですか？」

夜の闇に紛れた一本道。辺りに人は誰もいない

夜空の星々を見上げながら歩いていた彼に体当たりをして、わざと倒れ込んだ私に優しく手を差し出した最愛の人

三年かかった。ようやく探し出した……

もうどこにも行かせない。さあ……私のところに帰って来いよ……鍵

「すみませんでした。では」

私が誰なのか。それにまったく気づかないで軽い会釈をして背を向けた鍵

行かせたりするもんか

もうハナサナイ

私の手のバタフライナイフが彼の血で紅く染まった

背中を刺されたことで悲痛な声を上げ、地面に倒れこんだ彼に私は再び腕を振りおろす

そんな行動を二度三度四度と幾度となく繰り返していくうちに彼は動がなくなつた……

私は自分の手についた魅惑の紅い液体を舐めとって、冷たくなつた鍵に向けて笑いかける

お帰りなさい。アナタ……

薔薇好き会計編（前書き）

さてさて今回はいつも以上にキャラ崩壊が……
（ ^ ω ^ ; ）

薔薇好き会計編

「杉崎君、どうかしたの？」

「いや、最近ずっと誰かに見られてる感じがしてさ……」

最近の真冬は変なのです

せっかく杉崎先輩と中目黒先輩が二人きりで遊ぶという情報を得て、こっそり後を付けているというのに……まったく満たされません

むしろ中目黒先輩を見ていると黒い感情が沸き上がってきてしまうのです……

あれだけ待ち望んでいた光景なのに、どうしてしまったのでしょうか？

「大丈夫なの？ 僕心配だよ……」

「いや、心配してくれるのはありがたいんだけどさ……」

「どうしてそんなにくつつくんだよ？」

まさかこれは……嫉妬……でしょうか？

私は先輩のことが……？

そうだったんですね……それならこの感情も納得です……

「杉崎君、今日さ僕の家両親が留守で僕一人なんだ……」

「だからさ、今日家で晩御飯食べていかない？」

「それに杉崎君さえよければ、その……泊まっていつて欲しいんだ……」

杉崎先輩の携帯電話に仕込んだ盗聴器がとらえた会話は真冬をとてもワクワクさせるものでした

ただ……それは以前の真冬ならばです。今の真冬はこんな会話を聞いてしまって、中目黒先輩が……憎いです……

杉崎先輩を独占しようとする中目黒が……殺してしまいたくなるほど憎い……！

先輩は真冬だけを見てくれてさえいればいいんです。真冬は先輩さえいれば幸せです

だから杉崎先輩以外何もいりません

先輩以外の人間なんてみーんな

死んじゃえばいいのになあ……

「わ、分かったよ！だからそんな目で俺を見るなああ！！」

「あ、ありがとう杉崎くん！」

「だからその上目遣いをやめろって言うてるんだよおお!!」

「……いや、ほんと見ないで。だからそんな目で汚れた俺を見ないでええええ!!」

ちっ、中目黒め……

結局中目黒に押し切られて家までついてしまった。杉崎先輩

何か杉崎先輩に危険が及ばないように見張っておかなければなりませんね

安心して下さい先輩。真冬が貴方を守りますから……

中目黒が先輩の体に触れようものならその瞬間に窓ガラスを割って部屋に飛び込み、護身用に通販で買っておいたこのスタンバトンで

フツ、アハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ

夜通し部屋を監視していたところ一人警察官が真冬に話しかけてきました、すぐに眠ってもらい監視を続けました

その結果は特に何も起こることなく夜が明けて、杉崎先輩は無事でした

でも今思えば中目黒が眠っている隙に忍び込んでその息の根を止めてしまえばよかったのかもしれませんが……

あゝあ、選択肢を誤っちゃいました。分岐点ごとにセーブデータが作れないからリアルは困るのですよ

中目黒死亡イベントは杉崎真冬の誕生エンドに直結していたに違いないのに……

今からでも間に合うかな？

間に合いますよね？

向かいの家を拝借して監視をしていたところ、決行の時は意外にもすぐにやってきました

中目黒は何か用事で深夜に帰宅してきたのです。このチャンスを逃す手はありません

すぐさま手袋をはめて、礼儀正しい真冬は床に転がるこの家の人たちにお礼を言ってから血生臭い家を出ました

「……………中目黒せーんぱい」

「あれ？えつと生徒会の……………」

「椎名真冬です。」

「あ、そうそう椎名さん。ごめんねちゃんと覚えておくから……………」

バチッ

「…………え…………っ?」

ドサッ

人目につかないことを祈りながら中目黒を台車に乗せて近くの空き地に運びます

杉崎先輩、もうすぐですよ……

あれえ?こんなところに何故か手頃なレインコートと金属バットがありますねえゝ

早速拝借しましょう

ゴッ

ゴッ

ゴッ

あ、意外に楽しい……

ドゴッ

ドゴッ！

グチャッ！！

……でもやっぱりバットは重いです。お姉ちゃんはよく軽々と……
まあいいですが

それよりもあの可愛らしいお顔が見る影もなくなりました

潰れて、凹んで、抉れて、真っ赤で、ぐちゃぐちゃで、これなら誰
だかわかりません

フッフッ

あ、言い忘れてましたが別に覚えていて貰わなくてもかまいません
からね

一夜中をかけての作業でした。人一人を埋められる穴を掘るのなんて初めてでしたのでとても疲れました

全身筋肉痛になってしまって体の節々が痛いです

でもそれだけ真冬が頑張って作ったので、寝心地はそこそこではな

いでしょうか？

おやすみなさあい。中目黒せえくんぱい……

アハッ

「嘘だろ……なあ中目黒……中目黒おお！！」

中目黒は私が埋めた三日後に近隣住民に発見されてしまいました

どうやら埋め方が甘かったようです……

ですが、もちろん指紋も髪の毛の一本すらも残していませんし、真冬が疑われることはありません

何も問題は無いはずでした……

でも、先輩が泣いているんです……

中目黒がいなくなったことで先輩が泣いているんです……

真冬がしたことは間違っていたんでしょうか？

真冬はただ先輩と一緒にいたくて……そのために邪魔者をこの世から消し去っただけなんです

真冬は悪くありません……悪いのは先輩を奪おうとした中目黒の方です

そうです！真冬は何一つ悪くありません！！

だから泣かないでください先輩。寂しいのなら真冬が一生お側にいます

だから……

だから……？

真冬に何が出来るのでしょうか？

今思えば真冬は杉崎先輩に何かしてあげられたことがあったでしょう
うか？

真冬は先輩に迷惑をかけていただけなのではないでしょうか……

そうです……

真冬はいらない子だったのです……

先輩の役に立てないクズは死ななければいけないのです……

「……先輩ごめんなさい……さようなら。」

ただ……草場の陰からお姿を眺めることだけは許して下さい……

本当に……

じめんなさい……

H・I編（前書き）

急ピッチで仕上げましたので過度な期待はしないでくださいね（ω^・i）

H・I 編

長門の様子がおかしい

そう思い始めてからはや数日、俺はついに切り出すことにした

自宅の前までぴったりと、それこそ背後霊のように付いてきている宇宙人に

「なあ長門？」

「……なに？」

相変わらず液体ヘリウムのような瞳とともにお決まりの返事を返す
長門

しかし、明らかに行動がおかしい

どうして俺にこうまで付きまとうんだ？

「……迷惑？」

「あ、いや……迷惑って訳じゃないんだがな……」

「……そう。」

ぽつりとこぼしたように呟いた長門は背を向けてゆっくりと来た道を帰っていった

最近はこれが続いている。長門は部室を出る俺にぴつたりと張り付くように共に下校するのだが、俺の家まで必ず付いてくるんだ

俺の家に上がるわけでもなく、ただ付いてくるだけ

一体何なんだ？

「ねえキヨン？」

「何だハル……いや、言うな大体察しがつく。」

長門が俺の袖を掴んで離さない

昨日まではこんなことはなかった

だが、今日になって俺が部室に入ると中に一人佇み、本にかじり付

くような視線を向けていた長門は立ち上がり

……俺の隣、しかも間にハードカバー一冊がギリギリ入るか入らないかくらいの隙間を空けて腰掛けた

それからまもなくやって来たハルヒをはじめとする面々に好奇や不快感のようなものが込められた視線をぶつけられているというわけだ

「……迷惑？」

「いや……流石にこれは動きづらいかとは思つが……」

「……そう。」

気のせいが一瞬残念そうな表情を見せた長門は俺の隣からスタスタ
いつもの定位置へと戻り

閉じていた俺には読む気すら起こらない本のページを開いた

「……あんた有希に何を吹き込んだのよ？」

言うておくがもちろん俺は何も吹き込んでないし、頼んだ覚えもない

「ハルヒ、何を考えてるかは知らんが間違いなくそれは違う。」

「じゃあ、有希はどうしてあんたなんかにくつついてたのよ!？」

「俺が知るか!!」

俺が少し強めに言うとお茶を煎れていた朝比奈さんが小さく声を漏らして体を震わせた

しまった……

朝比奈さんを驚かせてしまったようだな。落ち着かねば……

小泉？

そんな奴は知らん

結局何故か不機嫌になったハルヒが強引に「今日はもう解散!」と宣言し、今日は帰宅することになった

そんな俺の後ろにはやはり長門がくっついていたのだが、昇降口までやって来た頃に長門は口を開いてこう言った

『うちに来て欲しい』

別に断る理由もない俺は今、長門のマンションのエレベーターに乗っているわけだが

妙な胸騒ぎがするのは何故だ？

何度か長門の部屋には行っているが、こんなに胸がざわつくのは初めてだ……

そうこう考えているうちにエレベーターは長門の部屋へと誘うかのように扉を開いた

長門はやはり俺の後について離れない。それは部屋の前までたどり着いても同じだった

しかも先程から威圧感のようなものすら感じる

……まるで俺を逃がさないように見張ってるみたいだ……

「……入って。」

「あ、ああ……」

俺は鍵のかかっていたいなかった扉に手をかけてノブを回した

「な、なんなんだ……こりゃ……」

長門の部屋に入った俺の目に飛び込んできたのは俺自身の姿だった
天井、壁、机、その他カップ等の小物も含めてすべてが俺の写真に
埋め尽くされていた……

さつきから続いていた悪寒はこれだったのか……？

「な、長門……これは一体……？」

俺は後ろを振り返り……

「……安心して。なにがあつたとしても私があなたを守るから。」

「涼宮ハルヒが世界を改変したとしても私がまた改変する。今度は
あなたと私の二人きりの世界に……」

「だから……ゆっくり休んで……」

H・I編（後書き）

ちなみに正式なタイトルは

対有機生命体コンタクト用ヒューマノイドインターフェース編

です（＾ω＾；）

ひぐらしのなく頃に 心苦し編

ねえ圭ちゃん……

どうしてそんなにレナと仲良くしてるの？

私たちは付き合ってるんだよね？

あのとき言ってくれたじゃない……

好きだ。って

「圭ちゃん一緒に帰ろ」

梨花ちゃんの都合で今日の部活はお休み。梨花ちゃん抜きでゲームをしてもどこか味気ないので今日は授業終了とともに下校の準備を始める

恋人同士なんだから途中までとはいえ一緒に下校するのは当然だよ
ね？

途中までと言わずにうちに遊びに来てもらおうか？

それとも私が圭ちゃんの家に遊びに行こうかな？

「悪い魅音、今日はレナの宝探しに付き合ってやる約束でさ。」

「へ、へえ、そうなんだ。それなら仕方ないね、おじさんは一人で帰るよ。」

私はとんだピエロだね……本当は言いたいよ

「レナなんかじゃなくて私を選んで！」って

でもそんなことを言ってしまうえば圭ちゃんを困らせてしまうから……

私はまた自分を騙す。

本当の自分は

跡形もなく押し殺す

今日の部活はジジ抜き

圭ちゃんの見え透いた罠にまさかの不覚をとった私とレナは罰ゲームをかけて一対一の勝負になった

レナは大切な仲間だけどサシの勝負となれば話は別だ

「どうやらおじさんの勝ちみたいだねレナ。」

私は最後の一枚をレナに差し出す

今回は特別ルールで前回勝者の私が罰ゲームの決定権を持っている

「はううゝ負けちゃったよう……」

さて、どんな罰ゲームにしようか？

まあ軽いジャブくらいで……

「はうう圭一君、レナ負けちゃったようー」

「ははっ、今日はどんな罰ゲームだろうな。」

……気が変わった

どうしてレナは圭ちゃんにすり寄るの？どうして抱きついてるの？

圭ちゃんは優しいから誰であろうと受け入れてくれるだろうけど、
そこにつけ込むなんて……許せない

私から圭ちゃんを奪おうなんていい度胸だね

私、本気……出しちゃうよ？

仲間だと思ってたのに……

裏切り者め……

私、許さないから

別の日、部活の準備をしていると教室から二人がいつの間にかいなくなっていた

何気ないことなのかもしれない、でも私はとても嫌な予感がした。
準備を沙都子と梨花ちゃんにまかせて教室を飛び出した

「レナ、圭一君のことが好きなの。」

「レ、レナ……」

「圭一君、レナと付き合ってください。」

二人を見つけた時、レナは顔を赤らめながら圭ちゃんと向き合っていた

どうやらレナが圭ちゃんを無理矢理こんな所へ拉致したみたいだ

そのうえ告白するなんて……馬鹿だねえレナは

私と圭ちゃんは恋人同士なんだからレナが告白したところで付き合うも何も……

「俺も……前からレナが好きだった。」

「レナ、俺と付き合ってくれ!!」

……どうして!?!?ありえない……

嘘だ。

嘘だ嘘だ……

嘘だあああああ！！！！

そんなことあるはずがない！！

だって圭ちゃんは私の……

気づけば私は二人の前に飛び出していた

「圭ちゃん！！」

「魅音！？」

「魅いちゃん！？」

「どういつことなの！？圭ちゃんはレナのことを好きなの！？」

私の問いかけに圭ちゃんは戸惑いつつも、曇りのない真っ直ぐな目を私に向けてゆっくりとうなづいた

……裏切られた。

私の純情を弄んだんだ……

友達として好きだった。なんて言い訳にすぎない。これは明らかな裏切り行為だ

……なのに何故だろう、私はまだ圭ちゃんのことを好きなんだ

この人を独占したい。独り占めにしたい。私なしでは生きられないようにしたい……

一体どうすれば……

……なあんだ簡単な方法があるじゃないか

あ、まずい……
顔のにやけが……
止められない

ゆるみきつた表情を二人に悟られないように私は背を向けて走り出した

圭ちゃんの目には私はどう映っているのだろう

こんなにワクワクするのは初めてだよ

圭ちゃんに幸せを

レナには罰を

私が贈るよ

「圭ちゃん、一緒に散歩に行こう。」

私は夫である園崎圭一を車いすに乗せて庭に出た

日の光と春の風が心地よい。でもやはり愛する人と共に暮らせるこ

とがなにより心地よい

現在、私の夫である園崎、旧姓前原圭一は言語障害と認識障害を患っている

もう誰かを頼らなければ、私がいなければ生きていくことはできない

原因は水銀。

彼は気化した水銀を知らぬうちに肺から吸収していたのだ

水銀は20 で気化する極めて有毒な物質

誰かが誰もいない時を見計らって圭ちゃんの家忍び込み、圭ちゃん衣服に少量だが、その極めて有毒な水銀を染み込ませていたのだ

夏が近づいたころには雖見沢の気温はいとも簡単に20 を越える。
ひぐらしがなくな頃には…… もう手遅れ

そんな悲劇的な病に倒れた圭ちゃんを献身的に介護する私を見て彼の両親はいとも簡単におちた

そして私の大親友の 竜宮礼奈 は圭ちゃんに告白した翌日の下校中に謎の男たちに襲われ、心身ともに重傷。五年が経った現在も入院中

そういえばしばらく礼奈と会ってないなあ……アイツ元気かなあ？

もう私は自分を騙さない。これからも愛する夫と二人で歩んでいくんだ

ひぐらしのなく頃に 心苦し編（後書き）

科学は苦手なものでもしかしたら水銀の件は起こり得ないかもしれないかもしれませんが…

フィクションですし、

大目に見てやってください（＾ω＾；）

黒い妹編（前書き）

長月さん遅くなってしまうて申し訳ないです（・ω・）（

リクエストの内容に对应えられているかも不安なところですが…

黒い妹編

最近のお姉ちゃんはとても楽しそうです

家に帰ってくると軽音部でのことを私に話してくれます

そのときのお姉ちゃん表情はすごく嬉しそうで、可愛くて、かっ
こよくて、美しくて、この世の何にも代え難いです

……ただ、食事を終わると部屋に籠もってギターの練習を始めてし
まうので私と一緒に居る時間が以前と比べると減ってしまったんです

輝いているお姉ちゃんをそばで見ているのは楽しいけれど……少し
寂しいな

それにしても今日はお姉ちゃん遅いな……

まさか事故に巻き込まれたとか!?

お姉ちゃん……

「ただいま」

よかった！お姉ちゃん無事だったんだね……

「憂遅くなつてごめんね。帰りにあずにゃんちに行つて、そのまま晩御飯も食べてきちゃった。」

「そうなんだ……美味しかった？」

私の問いかけに味を思い出してか表情をゆるませて頷いたお姉ちゃん
そしてお姉ちゃんは私と二三、会話を済ませると自分の部屋に戻つてしまつた

気づいては貰えなかつたけどテーブルの上には冷えてしまつたお姉ちゃんと私、二人分のハンバーグ

私は片方を手にとって電子レンジへと運び、片方を……

床に叩きつけた

最近、お姉ちゃんは梓ちゃんの話ばかりするようになった

今日も可愛かった

ケーキを食べさせ合った

抱き締めたら怒られた

…
頬にキスした

あずにゃんあずにゃんあずにゃんあずにゃんあずにゃんあずにゃんあずにゃんあずにゃん

もう聞き飽きた

お姉ちゃん是我的作った料理を食べて、私に世話されて、私のことを考えて、私に笑いかけてくれていたらしい

それだけでいい

「ただいま、今日もあずにゃんちに行つてたら遅くなつちやつた。」

「遅かったねお姉ちゃん。ご飯冷めちゃったから今温めるね。」

「あ、憂ごめん。今日はもう食べてきちゃったんだ。」

テレビの電源を入れてその前に座りこむお姉ちゃん

私はお姉ちゃんに温めなおしたオムライスを差し出し、戸惑うお姉ちゃんの口にスプーンで掬って運んであげた

「憂、おいしいけど私もうお腹一杯で……」

お姉ちゃんがおいしいって言うてくれた!!

やっぱりお姉ちゃんは私のご飯が好きなんだ!

もっとたくさん食べさせてあげるからね

嬉しさのあまり、私の手には自然と力がこもる

なかなか口を開けてくれないお姉ちゃんの頬を挟むようにして掴み、口をあけてもらう

「う、憂、痛いよ!やめてよ!」

お姉ちゃん、まだちょっとしか食べてないじゃない

ほら私が食べさせてあげるから

この口を開けて?

結局お姉ちゃんは私をはねのけて部屋に戻った

お姉ちゃんは変わってしまった……

戻って欲しいな前の、本当のお姉ちゃんに……

やっぱり私が……戻してあげないと駄目だよね

お姉ちゃんは私がいないと駄目なんだから……

今思えばお姉ちゃんを変えた原因は一体何だろう？

高校に入ったばかりの頃？

軽音部に入った頃？

ギー太に出会った頃？

梓ちゃんに出会った頃……？

そうだ……きっとそうだ……

梓ちゃんが……

あの泥棒猫がお姉ちゃんを……

私からお姉ちゃんを奪おうとしてるんだ……

渡さない。

絶対に渡さない……

気がつけば私は奴と純ちゃんの三人で撮った写真に包丁を突き立てていた

お姉ちゃん
は私の
お姉ちゃん
なんだから……

「お、おはよう憂……」

なんだか怯えている様子のお姉ちゃん

まさか私が怖いのか？

どうして？

私はこんなにもお姉ちゃんが大好きで大好きで大好きで大好きで大好きで大好きで大好きで大好きで大好きで……

私のこと嫌いになっちゃったのかな……

そんなの絶対にダメだよ！

私はお姉ちゃんが大好きなんだから、お姉ちゃんも私が大好きじゃないとおかしいよ！！

お姉ちゃんにまた私を大好きになつて貰わなきゃ…

「う、憂？どうしたの…？」

ごめんねお姉ちゃんちょっと痛いけど……

我慢してね？

家に帰って部屋の扉を開く

すると帰宅した私にお姉ちゃんが抱きついてきた

「おかえり憂々まってたんだよ？ちゅっ」

お姉ちゃんは満面の笑みで私の頬に口づけをする

ここまでお姉ちゃんを回復させるまで一ヶ月近くかった

あの日気絶させたお姉ちゃんの口と目、耳を塞ぎ、手足を縄で堅く縛って部屋に三日間放置した

意識はすぐ戻っただろうし、飲まず食わずのままはつらかったと思うでも、本当に怖いのは空腹と渇きではない

当たり前のように普段得られているものを絶たれてしまうのが一番怖いと私は思う

音も光も得ることができない完璧なまでの闇の中。そこで身動きが取れない状態にされて、三日もすればどうなるか

答えは『壊れる』

そしてその壊れたお姉ちゃんに食事を与えて命を繋ぎ、聴覚だけを解放して私は囁き続けた

「私はお姉ちゃんが大好きだよ？だからお姉ちゃんも私が大好きなんだよ。」

そう毎日のように、

孤独なお姉ちゃんに手を差し伸べるように囁き続けて、お姉ちゃん
はようやく元の私の知ってるお姉ちゃんに戻ってくれた

「私は憂が大好き… 大好き… 大好き…」

家に帰れば大好きなお姉ちゃんが私を迎えてくれるし、私がお姉ちゃんを迎えることもある

毎日私の作ったご飯と一緒に食べて

一緒に食器を片づけたり、テレビを見たり、宿題をしたり

もちろん少しずつですが、ギターの練習もやっています

ギターをやってるお姉ちゃんもやっぱりかっこいいなあ……

私の幸せな毎日は帰ってきました

これからもこの幸せは続いていくでしょう

永遠に……

あ、ちなみにお姉ちゃんはずちゃんが大嫌いになりました

理由？

私はなーんにも知りません

軽音部部长編（前書き）

遅くなってしまった割には少し軽かったなあと思ってます（＾ω＾；）

軽音部部长編

「ストーカー!？」

「そうなんだ…最近ずっと見られてる気がしてさ……」

不安そうに声を震わせて漑は和に助けを求めた

今は放課後、私たちの部室に和を呼んで相談に乗ってもらっている

漑は私でなく和に相談することを選んだ

私じゃダメなのかよ……

「りっちゃんどしたの? 顔強ばってるよ?」

「あ、いやなんでもない」

漑がストーカーのことで真剣に悩んでるのに私は漑に頼られてる和に嫉妬してる…

私ってひどい奴なのかな…

私も澪の力になりたい。今日からは私が澪を守るんだ…

ストーカー……

澪に手を出してみる。私が許さないぞ

「り、律……今日も一緒に帰れないのか？」

悪いな澪…

私はお前をストーカーから守らないといけないんだ

「最近全然一緒に帰れないな…」

ごめんな澪…

私だって一緒に帰りたい……でも……

心細さが目に見えるような表情を私に向けて澪は家に向かって歩きだした

外は冬空、ほぼ星明かりだけが道を照らす

始めのうちは唯たちと一緒に帰っているが、最後まで一緒に帰ることは出来ない

そしてここから零の家に戻るまでの道は街灯が少なく、一人で歩くにはあまりにも危険すぎる…

でも安心しろよ

私がちゃんと見張ってるし、怪しい奴がいたら直ぐにとっちめてやる

零は時折、後ろを振り返って後方に誰かいないか確認していた

私は零のヒーローなんだ。バレないように、陰ながらあいつを守ってやりたい

姿が見えないように私は電信柱の陰に隠れる

辺りには怪しい奴はいない。これなら今日はストーカーに襲われる心配はないな

それから何日間か見張りを続けてみたものの、怪しい奴の影もなかった

しかし私の中にはある変化が起きていた

姿のないストーカーに怯える澪は普段以上に可愛かった…

もっと見ていたい

このままずっと眺めていたい

もっと、もっと、もっともっともっともっと……

そんな愉悦に浸っているといきなり澪が駆けだした

今までにこんなことはなかった…

雪もちらつき始め、何だか妙な胸騒ぎがして私も足を速めて後を追う

澪は家の近く、だが反対方向の角を曲がった

何だ？

遷はどこへ行こうとしてるんだ！？

私は足音で感づかれる危険性も忘れて走って角を曲がった

…迂闊だった

走って曲がった角の先で私は人にぶつかってしまった

ドンと鈍い音を立てて私の胸に痛みが覚える

「す、すみませ……」

謝りながら私はぶつけたと思われる場所に手を当てた

…妙に生温かく、

少しドロツとした感触が私の手に残る

これは……血？

血なのか？

誰の血だよ……

一体どこから流れて……

……私の……血だ……

うわあああああああああ！！

痛い！痛い！！痛い痛い痛いいたいイタイイタイイタイイタイ
！！

イヤだ、イヤだ……死にたくない……

誰かぁ……誰か助けて……

漣、助けてくれよ漣おおお！！

「律、痛いか？怖いか？」

聞き馴れた声が私に冷静さを取り戻させる

み、漣………？

「お前が悪いんだぞ？」

漣は笑った

手に持った包丁から血を、私の血をボタボタと滴らせて…

「気づいてないとも思ったのか？お前が私をつけてることなんて最初から分かってたよ」

「私がそう仕向けたんだしな」

それから漣は表情は恍惚としたままで淡々と語った

私に漣を尾行させたのはバレまいと必死に尾行する私の姿を楽しみたかったからだそうだ

現に漣の鞆には小さな穴が空いていて、そこからビデオカメラで毎日私を撮っていたのだという…

「でもさ、私気づいちゃったんだよ…」

「映像の律もいいけどさ、やっぱり本物の律が欲しいなって。一生一緒にいたいなって」

だから…と言って漣は私を刺した包丁の刃を自分に向けた

「ずっと一緒に居ような律、愛してる」

突き刺さった刃が肉を破り、うずくまる私に漣の鮮血が降り注いだ

「あ…は…」

漣はそれでも笑っていた

ああ……

漣、私もやっと分かったよ

私も愛してる……

胸の痛みに耐えながら私は倒れ、死した漣から包丁を受け取る

漣……

私たちは永遠に一緒に居ような……

刃は再び刺さり、血はさらに溢れだした

でも先程の痛みも消えて、私には快樂だけが残っていた

完璧生徒会長編 前編（前書き）

リクエストの品を書き上げるまでの繋ぎを前後編に分けてお送りします（＾ω＾；）

今までとは少し違った感じになってるかな～と思ってます

……ヤンデレなのかただイカしてるのか分からなくなりました（＾ω＾；）

完璧生徒会長編 前編

あの日、私は彼のことが好きなんだと自覚した

しかし私から告白するなんて負けた気がして絶対に出来ない

だけど私は思った。……いや、思い出した

『私の好きな人はいなくなってしまう』

その証拠に私の本当の両親はいなくなってしまった……

そう考えると……時間はあまりないのかもしれない

早く彼を手に入れなくちゃ……

彼が欲しい。欲しい。独占したい。髪の毛の一本だって例外なく、彼のすべてが欲しい……

だけど彼にはちゃんと私を愛して欲しい

私だけを見て欲しい

こういうのをナギがヤンデレだって言ってたっけ……

ナギが見せてくれた本では相手を殺してしまって手に入れたと言っていたけど

それでは彼からの愛が受けられないから私はそれでは満足できない

どうしようかな……

「何か考えごとですかヒナギクさん？」

「ハ、ハヤテ君！？……大丈夫、何でもないわ」

……そうだった。今は仕事中だった

集中しないと……

「ハヤ太君」この書類はどう書けばいいの？」

「瀬川さん、本来は部外者の僕が書き方を知っている方がおかしいんですよ？」

「え」

……私、泉に嫉妬してる

大切な友達なのに……

私もあんなふうにハヤテ君に甘えたい……

でもそれ以上に甘えて欲しいかな？

だけど恥ずかしくてそんな事言えないし……

一体どうすればいいの……？

そんなことを考えながらふと辺りを見渡すとハル子がみんなから少し離れたところで本を読んでいた

ハル子曰く読書をするときは一人で落ち着きたいのだそうだ

私は一人になるのはあんまり好きじゃないな……

私はやっぱりみんなと仲良く楽しく過ごしてい……

……そうか！そうだわ……思いついちゃった

大切な友達よりも手に入れたいハヤテ君を手に入れる方法を……

これは我ながら名案じゃないかしら？

…… だけど一度でもミスをすれば私は間違いなく終わる

これは二択。

私が幸せになるか、

それとも死ぬか……

夜の闇に紛れて私は走っていた

辺りには誰もいない。従って目撃者はいない

そしてナギから所在を聞いておいたやけに大きなお屋敷の前にたどり着いた

鷺ノ宮伊澄さんのお屋敷に……

胸が高鳴る……

これは大好きな人を手に入れるための下準備

その為に私は今から……

人を、それも同級生を殺す

感情の高ぶりは私にとっての追い風だった

鷺ノ宮家のSPは正宗の鎧……ではなく餌食になり、全滅

障害のなくなった屋敷内を歩き回り、発見した宝物庫から適当に見繕った刀と小太刀をいくつか拝借し、一人一人の生を奪った

……一人、また一人と殺す度に私はワクワクしていた

これで彼を手に入れるのにまた一歩近づいたかと思うと次を殺すのも躊躇うどころか楽しくて仕方がない……

何も知らずに眠りについた鷺ノ宮さん。

あなたは眠りにつくとき朝は来ると思っていたでしょうね……

……残念ながらあなたが目覚めることはもうないわ……おやすみなさい

獲物はこれで手に入れた……
待っててね……ハヤテ君

完璧生徒会長編 後編（前書き）

一応今までにない形で締めくくりました
（＝ω＝）

完璧生徒会長編 後編

もう嫌だ……

耐えられない……

どうしてなんだ……？

どうしてこんなにも人が、僕の大切な人が殺されていくんだ……

大嫌いな神様……

もしもいるのなら、僕も……

殺して下さい……

それは夏休みに入って間もない頃、電話に出たマリアさんが突然泣き崩れた

その内容は伊澄さんが、鷺ノ宮家の人々がSPを含めて皆殺しにされていたという知らせだった

悲しみに暮れる僕たちに追い打ちをかけるかのように絶望は毎日休みなく訪れた……

瀬川さん、花菱さん、
朝風さん、千桜さん、
愛歌さん、咲夜さん、
西沢さん、ワタル君、
サキさん、桂先生、

その他にも僕と関わりを持った人々が皆誰かに殺された……

そして今日、二人よりも一足遅く帰宅した僕の前にはマリアさんとお嬢様であつたであろう細かな肉塊が転がっている

フラフラと屋敷内を歩き回るとクラウドさんとタマらしき肉塊も目にする事が出来た……

もう駄目だ……

死のう……

台所につくと、普段から手入れされていて鋭く光る包丁はすぐに見

つかった

美しさすら感じさせる刃を僕は躊躇うことなく自分の胸に突き刺すことが出来た

深く突き刺さり、とてつもない痛みがこみ上げてきたけれど僕にはそれが心地よかった

しばらくしてわざと傷口を決るように包丁を抜きとると、ドクドクと血が溢れだし、段々と意識が遠退いていく

すぐにそちらに行きます……
どうか待っていて下さい……
お嬢……さ……ま

「ハヤテ君！！よかった……」

真っ白なこの部屋は……
病院だろうか……？

……死ねなかったんだな……

普段から体を鍛えていたことが悔やまれる日が来るなんて思わなかった……

どうしてこの心臓は動いているんだよ!?

自然と怒りがこみ上げてきて僕の拳は包帯の巻かれた胸を殴りつけていた

「や、やめて!!お願いやめてハヤテ君!!」

「あなたまでいなくなってしまうたら私は……」

今、気がついた……

目の前で必死に僕の邪魔をしているこの人は誰だ……?

僕の邪魔するなアア!!

キエテナクナレエエ!!

めちゃくちゃに、力任せに振るった拳が誰かの頭部をとらえ、その誰かが苦痛に顔を歪ませる

待てよ、桃色をしたこの綺麗な髪……誰かに似ている……

そうだヒナギクさんだ……

でもそのヒナギクさんも殺されてしまった……

……いや違う!!

この人はヒナギクさんだ!!

ヒナギクさんは……

ヒナギクさんだけは殺されていなかった……

ヒナギクさんだけが僕を一人にしないでいてくれる……

そう思うと自然と涙が溢れだしてきた

コントロールできなくなった目の次は口が勝手に言葉を漏らす

「ヒナ……ギクさん……」

「ハヤテ君……」

そう呟いた後、どちらからというわけでもなく、お互いに強く抱きしめあった

温かい……

これが人の温もりなんだ……

未だに目に涙を浮かべているその人を僕はたまらなく愛しく想った

もう僕にはこの人しか残されていないんだ

どこにもいかせない。

絶対に離すものか！

「ヒナギクさん……僕、あなたのことが好きです。」

「愛してる。ずっと側に……いてください……」

僕たちの唇は重なり、その瞬間に喜びとも悲しみともとれる感情に
駆られて僕は泣き崩れた

「……………計画通り。」

ヒナギクさんの言葉が僕の耳に届くことはなかった

双子の妹編（前書き）

リクエスト受理からはや二ヶ月…

我ながら筆が遅いですな

（ ㇿ、； ）

今作は意外と言えば意外なあの人のお話…

双子の妹編

『双子』

それは似ているようで異なる存在

姉と妹

杏と棕

持つ者と持たざる者

高校に入り、彼と同じクラスになった

初めは見た目から怖い人なのかとも思っていたし、いつも涼しげな表情や不良と呼ばれる彼の振る舞いは確かに一見冷たく怖いものだった

でも彼は違った

本当の彼はとても優しく、友情に厚い人だった

ふと見せる楽しげな表情や笑顔

接してみてはじめて分かった彼の温かさに私は徐々に心惹かれてい

った

でもそんな私の思いはもう叶わなくなってしまった

私の恋には障害、あまりにも大きな障害があったから……

私の双子の姉の 藤林杏 がいるから……

私のお姉ちゃんも私と同じ人に恋をしていると知ったときにはもう遅かった

お姉ちゃんは私と違って積極的に彼にアプローチをかけ、思い人岡崎朋也 君に告白すると見事にその恋を実らせてしまっていたから

二人はお互いに呼び捨てで呼び合っていた

私も彼とそんな関係になりたかったな…

二人が付き合うこと自体に関しては最初のうちは悪いことばかりではないと思っていた

彼とお姉ちゃんがつき合うことになり、彼女の妹である私との接点も増えたから…

もちろんそれは辛くもあったが、彼と少しでも同じ時を過ごせることは嬉しかった

でも親しくはなれてもそこは恋人ではない

私はある日見てしまった。恋人同士の口づけを

私が好意を寄せる二人。だけど私は……

お姉ちゃんに深く、深く嫉妬していた

日に日に私の思いは変わっていった

大好きだったお姉ちゃんに向ける感情はもう好意じゃない

憎しみ、妬み、怒り

それらの負の感情だけだった

どうしてお姉ちゃんは私から恋しい人を奪ったのか

なぜお姉ちゃんは岡崎君を好きになったのか

双子だからといって同じ人を愛してしまうことはなかったのに…

運命を呪いたくなった

お姉ちゃんを消して私がお姉ちゃんになりたかった

私は……

あの日から数年が経った

藤林涼はすでにこの世にいない

三年前に姉妹二人で行ったハイキングの途中に行方不明になった

数ヶ月の搜索も実らず、私、藤林杏だけが生き残り、藤林涼はこの世からいなくなってしまうた

それはとても悲しいことだったけれど、私には彼がいたから乗り越えられた

大好きで

愛している

私だけの彼

朋也君さえいてくれれば私は他に何もいらぬ

…むしろ消えるべき邪魔な存在だ

そう、あの日から私はお姉ちゃんに…
藤林杏になった

三年の月日は私たち双子の容姿を全くと言っていいほどに似せた
だからこそ私は藤林杏になれた

あるとき助けを求めていたお姉ちゃん…涼の手を私は取らなかった
誰かに強く押されて急斜面を転がり落ちそうになっている、死から
逃れようと必死にもがき、私に助けて貰おうととつさに伸ばしたあ
の手を払いのけた

あの瞬間の表情は脳裏に焼き付いていて忘れることができない
でも不思議と心は痛まず、私は変われることに胸を躍らせていた

ごめんね。お姉ちゃん…

「杏……」

「朋也……」

私は今日、永遠の愛を誓う

大切な肉親を失ってまで手に入れた……奪い取った愛する人

お姉ちゃんが愛した人と……

おっとりお嬢様編（前書き）

時間かかったわりに……ω、;

おっとりお嬢様編

「むぎちゃーん、その花何て花？」

「綺麗な花ですね」

ギターの練習をしていた唯ちゃんと梓ちゃんが手を止めて私の手を見る

「綺麗でしょ？この花を育てて根っこの部分を擦って紅茶に混ぜると美容にいいんだって」

美容という言葉に少し体をピクリと動かし反応した澪ちゃんとそれをからかいながら律ちゃんも私の方にやってくる

「とってもお肌にいいって聞いたからお父様の知り合いに頼んで貰ってきたの」

私が部室の隅にプランターを置くとみんなはそれを物珍しそうに見つめる

みんなとっても可愛いわ

この綺麗な花が何なのかも知らないで……

みんなも花を見慣れてきてあまり気にしなくなってきた頃、

私はこの花の……トリカブトの根を乾燥させる作業に移った

一日陽の光に当てれば乾燥作業は終わり。明日はいよいよみんなに特製のトリカブト茶をご馳走する

そう考えたらワクワクしてきた…

唯ちゃんの笑顔が苦痛にゆがんで…

澪ちゃんは苦しみから泣き出して…

律ちゃんは異変に気づいて私を睨むかな？

梓ちゃんは…

「ムギ先輩？」

「ふえ！？あ、梓ちゃん…何でもないわ。ちょっとぼーっとしちゃっただけよ？」

「そうですか？」

…今日は早めに帰ろう

明日の準備は万全にしておかなくちゃね

「みんなそろそろお茶にしましょ」

律ちゃんと唯ちゃんは飛びつくように席に着き、漣ちゃんと梓ちゃんは半ばそんな二人に呆れながら席に着く

「「いっただつきまゝす！」」

ここでの楽しかった日々はもうすぐ終わる

でも安心してね？

もうこの部屋と寸分も変わらない一室は完成してるから

ドールハウス

みんなも私のコレクションにしてあげるわ……

昔から女の子の人形を使って遊ぶことが大好きだった

だから私は人形みたいに可愛い女の子と仲良く遊んだり過ごしたりするのが好きになった

昔から何一つ不自由することのない

望めばすべてが手に入る環境で育ったせいか、私はとてもワガママに、欲しい物はどんな手を使ってでも手に入れるようになってしまった

「何だか今日のお茶辛い？」

「…なんだか舌がヒリヒリするな」

「ムギ先輩が漢方みたいなものだって言ってたじゃないですか」

「…美容か……」

そんなワガママな私は今、人形を集めている。今までに好きになった人を人形にして…

私の父の知人にそういった技術を持った人がいて、その人に頼んで作って貰っている。

聞けばその人は心機能の止まった人間の血を抜いて、いくらか加工して腐敗しない人形を作るらしい

自分の父ながら死体加工のプロフェッショナルに知り合いがいるなんて、あまりにも広い人脈に恐怖するとともに感謝を覚える

今回のトリカブトだってそう

父の友人から植物界最強の毒を持つと言われるトリカブトの中でも
エゾトリカブトという種類の物を譲って貰った

このエゾトリカブトは根を乾燥させて少し加工した物を接種すると
呼吸と心機能が停止、死に至るらしい

…私も詳しくは知らないのだけれど

とにかく下準備は整った

「…っ!?!」

「ム…ギい、これは……?」

「くっ、くる…しい…」

「……イヤだア…」

ゾクゾクしちゃう…

みんなの新たな一面を見ることが出来た

いつもなら楽しく笑いあう時間なのだけれど、今日は痛みに苦しむ時間

……見ているだけで胸が痛くなる

みんな早く楽になって……

「もしもし、私です。準備が整いましたので……はい。お願いします」

あと数十分後には迎えの車と客人送迎用のリムジンががやってくるだろう

みんなが到着予定の今夜が楽しみ……

見慣れた部室を完璧にコピーした一室に私は制服を着て入った

そこでは唯ちゃん、律ちゃん、澪ちゃん、梓ちゃんが椅子に座って私を待っていた

「みんな、お茶が入ったわよ」

私たちはこれからもずっと一緒です

おっとりお嬢様編 梓視点（前書き）

あらかじめ言っておきますと…

梓は病みません（＾ω＾；）

ヤッテヤルデスとかで慣れてますでしょ？

なので比較対照としてこの話を作りました

次話の唯と比べてみてくださいm（――（――m

おっとりお嬢様編 梓視点

最近ムギ先輩の様子がおかしいんです

……おかしいっていうか、なんだか違和感があるって言ったほうがいいのかな？

とにかく、なんだかいつものポーツとした雰囲気とはどこか違う、時々何かを熟考しているような…そんな表情をしていることが多いなっただんです

ほら、今も…

「むぎちゃんその花何て花？」

「綺麗な花ですね」

練習をしていた唯先輩が花に見とれて手を止めてしまったので私も仕方なく手を止める

確かに綺麗な花だけど…

なんだろう？この胸がざわざわする感覚……

「綺麗でしょ？この花を育てて根っこの部分を擦って紅茶に混ぜると美容にいいんだって」

ムギ先輩が部室の隅にプランターを置くと唯先輩が真っ先に近寄ってそれを物珍しそうに見つめだした

この綺麗な花は一体何て花なのかな？

とりあえず家に帰ったら調べてみよう

気づけば唯先輩も気にしなくなるほどに時が過ぎていた

結局調べてみたもののあの花が何かは分からなかった

でも私の中の妙な不安というのか、そのざわつきは続いている

「ムギ先輩？」

気づけば私はムギ先輩に声をかけていた

どうしてかはわからない。だけど…

「ふえ！？あ、梓ちゃん…何でもないわ。ちょっとぼーとしちゃっただけよ？」

「そうですか？」

そうか、私はムギ先輩が怖いんだ……

理由は分からないけれど、本能が告げている……

『ここから逃げろ』って

「みんなそろそろお茶にしましょ」

律先輩と唯先輩は飛びつくように席に座り、漑先輩はそんな二人を見て呆れながら席に着いて私も少し遅れて定位置に座る

ムギ先輩はそんな私たちにいつものように、変わらない笑顔でお茶とお菓子を持ってきてくれる

「いったただつきまゝす！」

「あの… 澪先輩」

「ん？ 何だ梓？」

律先輩と唯先輩がお茶菓子に手を伸ばしているうちに私は澪先輩に相談を試みた

「何だか最近のムギ先輩様子がおかしくくないですか？」

「どこかって言われちゃうと困るんですけど…」

そんな私の言葉に澪先輩は小首を傾げて

「気のせいじゃないか？」

と言った

やっぱり私の考え過ぎなのかな…？

私は紅茶のカップを口へと運んだ

「何だか今日のお茶辛い？」

「…なんだか舌がヒリヒリするな」

一気に飲み干してからそう呟いた唯先輩も舌をベーツと垂らして「
ちらを向く律先輩もムギ先輩に対する不信感なんて微塵もなさそうだ

「ムギ先輩が漢方みたいなものだって言ってたじゃないですか」

多分私の考え過ぎなのだろう

そう思わない限り、私のモヤモヤは晴れない

「…美容か……」

漣先輩だって何も怪しんでなんかいないし……

「…っ!？」

「ム…ギい、これは……?」

「……イヤだア……」

くっ、くるし…い…

何…これ…?

段々と薄れていく意識の中で私はムギ先輩へと目を向けた

…ムギ先輩は笑っていた

いつものように、私たちに微笑みかけている

私は間違っていないかったんだ…

天才ギタリスト？編（前書き）

『メリー苦しみます！』

本日はイエス・キリストの何たらかんたらの日です。

もひとつ言つとネロとパトラッシュが死んだ日です。

決して男女がいちゃつく日ではありません

私はしっかりと働いてきます（＾ω＾）

リア充爆発しろ！w w

天才ギタリスト？編

トリカブト

見かけは美しい花なのだけれど、その根には猛毒を持つ

摂取すれば高確率で心停止などを引き起こし、死に至る場合が多い…

ってこの間何かの深夜番組で言ってたっけ

ムギちゃんが部室に持ってきたお花はまさしくそのトリカブト

しかも一番危険視されていたエゾトリカブトに間違いない

ムギちゃんはこの花で何をするつもりなのか…

そんなの決まっている

誰かを…

多分私たちを殺そうとしてるんだ

ゾクゾクしちゃうな…

正直に言つと私は毎日が楽しくて仕方がない

こんな日々がずっと続けばいいと思う

それがたとえどんなに悲惨で無惨で恐ろしい過程を経た形であつてもだ

「むぎちゃん、その花何て花？」

「綺麗な花ですね」

私は何も知らない振りをしておくことにした。ムギちゃんが何をするのを見たくなつたから

あずにゃんは本当にこの花が何なのか分かっていないようだし、多分ムギちゃんも私がトリカブトを知っているなんて思ってもいないんだろうな〜

「綺麗でしょ？この花を育てて根っこの部分を擦って紅茶に混ぜると美容にいいんだって」

…ビンゴ

美容だなんて曖昧な言葉で誤魔化そうとしてる…

ムギちゃんってば可愛いなあ…

そんなことを思っていると澪ちゃんとそれをからかいながら律ちゃんもこっちにやってきた

「とってもお肌にいいって聞いたからお父様の知り合いに頼んで貰ってきたの」

すごく楽しいことになりそうだなあ…

「ねえ憂、お願いがあるんだけど」

私も計画を実行に移すことにしようつと

「何？お姉ちゃん」

「あのね、明日からしばらく私と入れ替わって欲しいんだ」

そう言っていると予想通りに戸惑ってアタフタし始めた憂

そんな憂の首筋に手を回して私は愛し合う恋人のように激しいキスをする

これで憂は何も考えられなくなるんだ

「いいよね憂？」

「……うん」

憂には私になって貰おう

数日後、憂と連絡が取れなくなり、他のみんなも行方不明になった
幸い憂には発信機を取り付けてあるのでどこにいるのか

…いや、多分死んでいるだろうから憂の死体があるのかは分かる

さて、迎えに行こうかな

警備の人たちに見つからないように、見つかってしまえば警備の人
たちはいなかったことにして、私は大きな部屋の前にたどり着いた
音を立てないようにそつと扉を開けると、そこは私たち軽音部の部
室を完璧にコピーした一室だった

中央にあるテーブルには私…ではなく憂、律ちゃん、澪ちゃん、あ
ずにゃんが椅子に座っていた

見たところ生きているようにも見えるけれど、私の直感が告げている
あれは死体だって

「みんな、お茶が入ったわよ」

そうこうしているうちにムギちゃんがお茶の入ったカップを運んで
テーブルの前にやってきた

その表情は笑顔

満面の笑顔

…すごく可愛いよムギちゃん

殺したくなっちゃう

「…じゃあ、そのお茶私も貰おうかな」

私が背後から声をかけるとムギちゃんは勢いよく振り返った

もちろんその瞬間に私はムギちゃんの喉元に持参した包丁を突き立てる

「っ……」

ゆーっくりと私が手を上下させるとムギちゃんから真っ赤な液体が流れ出る

人差し指でそれをなぞって舐めてみたけれどお世辞にも美味しいとは言えなかった

「…お茶貰うね」

お茶はやっぱ美味しいや

床に倒れ込んだムギちゃんにはまだ意識があるようで苦しそうに、おそらく死んだ方が100倍マシなくらいの苦しみの中で私に視線をくれる

「私、ムギちゃんが今言いたいこと分かるよ。当ててみようか？」

「『どうして？私が殺したのに！？』でしょ？」

やっぱり気づいてなかったんだねえ

憂と私が入れ替わってたことに…

「私は殺されてなんていないよ？むしろ殺されちゃったのは……ムギちゃんの方だよ」

私がそう言った瞬間にムギちゃんがバチヤッと音を立てた

ムギちゃんは自分の血だまりで深い眠りに…墜ちた

冷たくなったムギちゃんだったものを私はいつもの位置に置いた

平沢唯

秋山澪

田井中律

琴吹紬

中野梓

軽音部の5人が座っている様子を私は携帯に納め、待ち受けに登録する

「みんな…大あい好きだよ」

その後、私はその場に火を放って家路についた

これで5人が過ごす時間は永遠になる

桜高軽音部は…永遠になるんだ

猫に魅せられた少女編（前書き）

ひっさしぶりに書いてみました
りハビリですね（＾ω＾；）

最近はどうにも時間がうまく使えない（、・ω・、）

でも…やめはしませんよ

（、・ω・、）

猫に魅せられた少女編

「おはよう阿良々木君。もう起きてた？私のこと考えてくれてた？早く会いたいなあ…早く学校来てね？私今日は早く目が覚めちゃったからさ、阿良々木君のことずーっと考えてたんだよ。会いに行こうかとも考えたんだけどね、さすがにそれは迷惑かなと思ったからさ、やめたんだよ。あ、でも阿良々木君の寝顔が見られるんだったらやっぱり行けばよかったかな？ちよつともつたいたいことしちゃったかもしれないね。明日こそは朝起こしに行つてあげるから楽しみにしててね。あ、阿良々木君そろそろ着替えないと駄目だよ？阿良々木君は遅刻しちゃダメ。絶対にダメだよ？一分一秒でも私に会う時間を無駄にしちゃダメなんだから…あ、でも朝ご飯はちゃんと食べないとだめだからね。朝ご飯を食べるのと食べないのじゃ脳の働きにすごく影響が出るんだよ？阿良々木君はご飯派？それともパン派？私はご飯の方が好きかなあ…阿良々木君もご飯派だよ？結婚したら毎日おいしいお味噌汁作るから楽しみにしててね？あ、また話し込んでしまったね…つい阿良々木君と話していると時間を忘れちゃうよ。それじゃ、学校でね。私、待ってるから」

そこで通話は切られた

朝一番、しかも毎朝早朝の5時ちようどに電話をかけてくる人物がいる

猫に魅せられた少女

羽川翼

彼女に異変が現れ、そしてこのモーニングコールが始まったのはつい最近のことだ

ある日の放課後に僕は羽川に学校の屋上（うちの学校は出入りが自由になっている）へ来て欲しいと呼び出された

ここは晴れた日には美しい夕日が一望できる。そこから来るのかは分からないが、ここは学校一の告白スポットになっている

だからこそ羽川の意図が正直言っただけでもって分からなかった僕には戦場ヶ原ひたぎという愛すべき彼女がいることを羽川も知っているはずなのだ

「あのさ…羽川」

呼び出しておきながら僕よりも5分ほど遅れて現れた羽川は僕を押し倒して唇を奪うと、驚きで動くことすらままならない僕を残し、すぐさま去っていった

そしてその日を境に羽川は変わった。それはおかしくなったと言えるほどに

クラスの委員長たる彼女はクラスメイトを動かす術でも心得ていたのだろうか

羽川は僕の彼女を…

戦場ヶ原をクラスという集団でいじめ始めた

幸いにも戦場ヶ原はいじめに屈するような奴ではないのでこのいじめは一週間と経たないうちに終息した

だが、こうなることは羽川も分かっていたはず、だからこそ戦場ヶ原はこう言っていた

「これは宣戦布告だ」と

早朝6時30分

僕は学校に着いた

そして真っ直ぐに教室に向かう

それは僕の席に座り、僕を待ちかまえていた

「阿良々木君、遅刻」

始業時間にはまだ2時間くらい余裕があるはずなのだが

「悪いな羽川。少し人助けをしていたんだ」

以前ならば軽く受け流すか、少し乗ってくる程度のネタだった

だが、

「そっか、そうだね。阿良々木君は優しいから困ってる人がいたら助けちゃうよね。今日は誰を助けたの？お婆さんあたりかな、道で困ってた？階段が上れずに困ってたとか？それならもちろんおんぶして上がってあげたんだよね？私も阿良々木君におんぶされたいなあ、でもそれならもう少し痩せないとだめかな？……ここはつつこむところだよ？そんなに重くないだろ。ってさ、まったく阿良々木君は乙女の扱いというものをもう少し勉強すべきだよ。まあ、そこを含めて私は阿良々木君を好きでいるんだけどさ。ねえ、阿良々木君は私のこと好き？聞くまでもないか。戦場ヶ原さんと付き合っているのは孤独な彼女を助ける慈善行為なんだよね？やっぱり阿良々木君は優しいな。でもやっぱりそれは偽善だよ？そろそろ自分のために生きようよ。本当に好きな人と付き合うべきだよ。だから阿良々木君、戦場ヶ原さんなんかとは今日別れてさ、私と付き合ってよ。ううん、付き合おうよ。付き合おうね？寧ろ結婚しようか？そうだ。そうだよ結婚しちゃおう！阿良々木君が望むなら既成事実を作ってしまったてもかまわないよ？私のすべては阿良々木君のもので、阿良々木君のすべては私のもの……私たちは相思相愛なんだから」

羽川の目はただひたすらに僕を見つめている

あきらかにこれは…

異常だ

「なあ羽川、今日…今からちょっと忍野のところに行かないか？」

「それってデートのお誘いだよね？行く。絶対に行くよ。おしゃれしていかないかね。阿良々木君をびつくりさせちゃうよ？」

話が長くなりそうなので僕はスッと教室を後にする

羽川はおそらく何らかの怪異に憑かれている

あの異常なまでの僕への執着

ほぼ間違いないだろう

怪異だ

「忍野？……いないのか？」

塾の廃墟ビルにはいつものアロハシャツの姿はなかった

忍野がいない廃墟ビル

こんなにも物静かで

「不気味だ……」

「にはやは、人間……お前、終わったにや……」

「ブラック羽川！？何で……っ！！」

そこに現れたのは羽川翼であって羽川翼でない存在

『ブラック羽川』

「まさかこんなにも事がうまく運ぶなんてにやあ…」

「こんにゃに人気の少ない場所にわざわざ連れてくるにやんて…」

そう言つとブラック羽川は僕に飛びかかってきた

「ネ…コ、て、てめえ……」

ブラック羽川は抱きついてきたただけだ

だがそれは痛くて辛くて苦しくて死にそうになるほどの攻撃

こいつの能力 エナジードレイン が僕を拘束する

「ネ…コ、無駄…だ。はな…せえ……」

「…無駄？分かってないにやあ人間。お前はもう終わってるにや」

「こうしていればお前は動けにやい。いくらお前でも飲まず食わずじゃ生きていけにやいだろ？」

「ご主人はお前と共に死ぬことを選んだのにや。だからこうしてお前はご主人の腕の中で……」

ブラック羽川は、羽川翼は本気だった

あれから既に日を何度かまたいでいるが、僕は未だに解放されていない

僕にもう力はあまり残されていないし、段々と意識も遠のいてきた

もう…駄目なのか…？

「…教える」

「…にや？」

流石に弱っているのかブラック羽川の声は弱々しかった

「…羽川は、どうして変わったんだ？」

僕の問いにブラック羽川はフツと鼻を鳴らしたように笑い

「ご主人の男を見る目は……人間これは全部お前のせいだにや……」

訳の分からぬ答えを吐いて倒れた

ブラック羽川が倒れ、僕から離れたことでエナジードレインは止まった

だが、僕にももう立ち上がる力は残されていなかった

自然と瞼が落ちてくる

手足が動かなくなる

眠気が…襲ってくる…

このまま眠ってしまえば二度と目覚められないだろう

だが、どうしても逆らえそうにない…

「戦場ヶ原……ごめん……」

戦線のリーダー様編（前書き）

一ヶ月に一作のペースですね（ω、）
ww

戦線のリーダー様編

もう二度と大切な人たちを失いたくない……

あの子たちを失ったあの時の思いは悔しいなんてものではなかった

私は何をしたのだろう

何がいけなかったのだろう

そこまで悪いことをした記憶はない

あったとしてもせいぜいイタズラ程度……

でも奪われた

ある日……突然に

私の大切な弟妹が……すべて

ふざけるな……こんな理不尽があつてたまるか

残酷な神を憎み、恨み、恐れ、私はこんな理不尽な運命を呪いながらその生涯を終えた

そんな私が新たに目覚めた世界は死後の世界だった

そこには『死』というものがないかわりに稀に存在自体が消えてしまふことがある

なんら『死』と変わらないそれを私は『消える』と 呼ぶことにしている

まだ…私から大切な人たちを奪う気なのか奴は…

そんなことは絶対にさせない

死後の世界で出会った仲間たちと私はグループを作り、そのリーダーに就任した

その名もSSS

死んだ世界戦線

理由はもちろん…

神に抗い、戦線のメンバーを消させないためだ

私は神を見つけたし…

復讐するためにここにいるのだから

そんな戦線に新しい思想をもたらした人物が現れた

その人の名前は音無君と言った

彼は生前に叶えられなかった想いを遂げることで報われる

報われることで『消える』のだからそれは幸せなことなのだよと言った

……正直、私はそれが正しいことなのだろうと思った

でもそれを認めることは出来なかった

私は今の日々に満足していて、それが永遠に続けばいいと思っていたから…

だから私は…

「音無が天使に消されちゃっただろ!？」

「……ええ、彼は私を逃がすために天使の前に立ちふさがったの…」

「そしたら天使が新たな能力を使って音無君を……」

戦線メンバーに彼がいなくなったことを報告するとその場の空気が一気に変貌した

彼の存在はそれだけ大きかったのだろう

「……許さねえ」

「天使の奴…絶対に許さねえ!!」

彼と最も親しかった日向君の怒りは最高潮で今にも天使に復讐しようとしている

他の戦線メンバーもそれぞれ音無君を失ったダメージは大きいようだ

「彼……とても悔しそうだった……」

「この世界でも理不尽な死を強いられるのかつて……」

ここまで来ると私自身も熱が入ってきて少し声に震えが入りだした

「大切な仲間を殺されて黙っている貴方たちじゃないでしょう?」

「復讐よ!!」

みんなが思い思いに怒り、叫び、狂い出す

復讐に燃えるその表情はあの時の私に似ていた

「…これは戦争。人と神の……」

「それでね、今日はみんながスゴくやる気になって天使に総攻撃よ」

「特に日向君は傷を負うことも恐れなくて天使に猛攻撃……あれは貴方にも見せてあげたかったわ」

「ちょっと聞いているの音無君？」

私の言葉に彼は泣いているようだった

よくよく見れば彼は小さく口を動かしている

「……して……」

「え？」

「どうしてこんなことするんだよ!？」

「こんなことしても誰も幸せになんかなれやしないじゃないか!！」

「奏だってお前たちから身を守る為に戦うんだ！」

「奏はお前たちを救おうとしてるんだぞ!？」

音無君は涙ながらに熱く語った

強く握った拳から血を滲ませて……

「
:
い
い
」

[illegible]

笑いが止まらない

「な、何がおかしいんだよ!？」

「ねえ？音無君、貴方ここでの暮らしは嫌いだった？」

「辛かった？苦しかった？早く消えたかった？」

私の言葉に彼は口を籠もらせる

「私はねえ…大好き。みんなと一緒にバカやって、笑いあって…」

「私は『今』を守るためなら何だってする。その為なら敵を作り、綻びを…直す」

「なっ!？」

構えた銃に音無君は酷く怯えていた

この世界に『死』はない

けれど痛みは存在する

無機質な銃声が地下室に響いた

私が狙ったのは足

まあどうせ鎖で繋がれた音無君は動けないのだけれど…

次は肩に銃口を突きつける

「音無君、考え直してくれないかしら？」

「私ね、実は貴方のこと気に入ってるのよ。人望もあるし、みんな

も貴方が戻ってきたら喜ぶと思うのよ」

彼の浮かべた笑みの意味は語らずとも分かるだろう

気が変わった…

私は銃口を彼の目へと向けなおし、引き金を引いた

「ぐがぁぁぁっ!!」

次は…喉、耳を潰して

腹部には狙いを定めずに乱射

「考え直してくれた？」

喉を潰したのだから返事はあるわけがない

でも彼は真っ直ぐに強い意志を込めて残っている片方の眼で私を見つめる

「……そう。じゃ、また明日ね」

最後に額に銃弾を撃ち込んで私は部屋を後にする

先程も言ったが私は『今』に満足している

音無君と二人きりで過ごすこの時間も決して嫌いではないのだ

天使（仮称）編（前書き）

そろそろ会心の一作を作りたいですねえ…

若干苦しい感じになっているかもしれませんが（＾ω＾；）

私はただ結弦と一緒にいたいだけなのに

まあ、結弦以外が全員報われて消えてしまえば二人きりになれるなんてこと

を思わなかったといえは嘘になるのだけれど……

ともかく

「…ハンドソニック」

今は血走った目をしたこの人達を退けないと

「……くそっ」

「……shit！」

「……やはり今のままでは天使には勝てないか、退却するわよ」

あの娘…ゆりは何かを企んでいる気がする

でも何より気になるのは彼らの言葉

結弦が…いなくなつた…？

「ねえ、その貴方？」

「うわぁ！！て、天使だ！」

大山君と言っただろうか

警戒されているのが見て取れる。だが、見るからに優しくそうな彼なら私の話を聞いてくれるかもしれない

「結弦……音無君はどこへ行つたの？」

彼から質問の答えを聞いたときは驚きを隠せなかった。脱力感が押し寄せてきてどうすることも出来なかった

私が結弦を消した？……ありえない

第一、私にそんな力はないし、あつたとしても結弦に使うわけがない

結弦は一体何処へ…？

そう考えた時、ふとあの笑みがよぎった

結弦が失踪したのはゆりが関係しているのではないだろうか？

私を犯人に仕立てあげたのはそれに対するカモフラージュと考えれば辻褄が合う

そうだ…

きつとそうだ。

そうに決まってる…

結弦はゆりに監禁されているに違いない

「ありがとう」

「ふえっ！？」

結局、彼…大山君の言葉には何も反論しなかった

自らが属するグループの信頼するリーダーとそのリーダーが標的と定めた相手

どちらを信用するのは火を見るよりも明らかだから…

それにしても許せないのはゆり

結弦を独占するつもりなのね…

私から結弦を奪おうだなんていい度胸をしてる

考えられる監禁場所は数少ないのにね

まあ、どこにいるにせよ…

ゆりを潰して結弦を取り戻すだけのこと

「ねえ？まだ考え直してくれないの？」

「……………」

「……ねえってば」

「考え直すのはお前だ！！ゆり！」

「みんな理不尽な死を迎えたのは不幸だった。許せないよな。でもな！それでも受け入れて前に進まなきゃダメ……ぐあつ！！」

「…偉そうに説教かよ。あなたはどこぞの主人公様ですかあ！？」

「ぐつ……ゆり、お前……」

「あ、そうそう私ね決めたのよ」

「今のあなたは私に従ってくれない……」

「だから、私があなたを変えてあげる。私に従順な私好みの男に変えてあげるわ！！」

扉越しに声が聞こえる

不愉快なあの子の大笑いが…

結弦と二人閉じこめられた地下室

少し改築されているようだけれど、この程度の鉄扉なら壊せそう

「…ハンドソニック」

「奏！！助けに来てくれたのか！」

「くそつ、思ったよりも早く嗅ぎ付けられたか…」

待ってて、結弦。すぐにカタを付ける

「悪いけど、今から私と音無君は甘ああいひとときを過ごすんだから……邪魔しないでくれる？」

「貴女の思い通りにはさせない……」

「……はあ？何言ってるか聞こえないんだけど？てか死んで？」

私の想像以上にゆりは強かった

拳銃で私に隙を作り、近接格闘で確実にダメージを与えていく

隙なく降り注ぐ攻撃に対してガードスキルが間に合わなくなってきた…

このままでは……

「死ね！死ねっ！死ねえええ！！」

……仕方ない

「結弦！少し我慢していて！」

「ガードスキル……ハウリング！！」

「うあああああああ！！！！耳が……耳があああああ！！！！」

結弦も相当なダメージを負っただろう

よく音の響く地下室でハウリングを使ったのだから……

でも、狙い通りに間近で喰らったゆりは耳が潰れて怯んだ

…勝機ね

「…ハンドソニック」

ズタズタに引き裂いてあげる…

「お……お願い……します……」

「も……もうゆる……ひっ！」

喋るなど言ったのに…貴女には言葉が通じないのかしら？

ペラペラとうるさい口は首ごと切り落としてしまおう

「かつ、奏？」

「お待たせ結弦。遅くなってごめんなさい」

そんなに怯えて…

ゆりが怖かったのね

「もう大丈夫よ。安心し……」

「くっ、来るなああ!!」

……え？

「ゆ、結弦？何を言っ……」

「……人殺しばかりだな、この世界は」

「この世界はめちゃくちゃだ……皆イカれてるんだ……ははっ」

「だがな、俺は……俺だけは違う。お前達とは違うんだあああああ
あああ!!」

ポトリと一つ音がしたかと思うと、結弦の体がグラリと揺れて倒れた

私は結弦の……結弦だった人の首を落としていた

どうしてこうなってしまったのだろう……

私はただ……結弦と一緒にいられたらそれでよかったのに

……結弦が壊れたのは誰のせい？

ゆり？

あの人たち？

それとも……

いや、決まっている。あの戦線のメンバーだ

…潰してやる

私から結弦を奪い、壊した奴らを消してやる……

「やめろ…もう、やめてくれ……」

「天使…貴女は何故…我々を……？」

「僕たちが何をしたっていうのさ……」

何をしたのか。か…

「私から奪った。大切な人を……理不尽に……」

「だから私は貴方達を許さない」

10032号編(前書き)

新生活が始まって結構バタバタしてしまいました(´ω｀;)

試験的に執筆にPCも使ってみましたが見覧に影響ですかねえ
ω・、)？

「この感情は何なのでしょうかとミサカは疑問を呈します」

「ふむ……そうだねそれはきつと君が彼に……」

「こ、恋い！？アンタが！？あ、ああアイツに！？」

お姉さまに報告したところ顔を真っ赤にしています。どうやら驚愕のあまり極度の興奮状態にあるようです

解りきっていたことですがお姉さまもあの人に好意を寄せている……恋をしているようです

「……それでは失礼しますとミサカは彼からプレゼントされたハート型のネックレスを見せつけながらお姉さまに別れを告げます」

お姉さまはムキーという表現がぴったりの顔をしていました

彼、上条当麻に恋心を寄せる女は少なくはありません

お姉さまもその一人、もちろんミサカも例外ではありません。ですが……

想いが一番強いのは間違いなくミサ力です

「よおミサ力妹じゃねえか」

ツいています。彼に出会いました

「どうもミサ力は無愛想を装って胸の高鳴りを隠します」

「胸の高鳴り？何か俺に隠し事でもあるのか？」

相変わらずの愚鈍さですね。もう呆れてしまっただけに…

「いえ、何でもありません。ところでこんなところで何をしているのですかとミサ力は素朴な疑問を投げかけます」

「よくぞ聞いてくれた！！不幸な上条さんが珍しく福引きで遊園地のペア招待券を当てたのですよ！」

「ペア招待券だから一人じゃ使えない。でも一緒に行く相手もいないし…」

「上条さんは宝の持ち腐れ状態になり、不幸だー！と叫ぼうかと考えていた時…」

「なるほどそんなときにミサ力に出会ったのですねとミサ力は鋭い考察力を披露します」

これはチャンスなのではないでしょうか

お姉さま以下その他大勢を出し抜いて遊園地デートといきましょう

「てなわけでミサカ妹、お前はこれから時間あるか？」

「もちろんです！とミサカは少し興奮気味にあなたの手を取ります」

受付ではカップルに見えたことでしょうか？

そうであつたとしてもまったく悪い気はしません

「さて、まずは何に乗りませうか？」

「あれがいいですとミサカは高所から猛スピードで降下している危険物ならぬ乗り物を指さします」

「ジェットコースターか、あんまり得意じゃないんだけど……まあいいか」

「善は急げですとミサカは興奮気味にあなたの手を引きます」

「そ、そんなに慌ててもジェットコースターは逃げませんよ！？」

ジェットコースターを皮切りにミサカと彼はその後も遊園地デートを満喫しました

楽しい時間はあっという間に過ぎてしまいます

遊園地を後にしたミサカたちは公園にやってきました

辺りはすっかり闇に包まれていて人は見当たりません

「計画を実行するなら今しかない」とミサカは決意表明をします」

ミサカは今日のデートを心の底から楽しんでいました

ですが同時にネットワークで話し合いもしていたのです

上条当麻をいかにして私……私たちのものにするか、と

答えは先程出ました

学園都市第一位の超能力者 アクセラレータ 一方通行は脳にダメージを負ってミサカネットワークの代理演算に頼って生活しています

これに応用すればいいのです

彼の思考をミサカネットワークが代理で行うというのがミサカ達が出した結論です

そのためにまずは彼の脳に致命的なダメージを負って貰わなければ
いけません

「疲れたなーそろそろ帰るかミサカ妹。送っていくぜ」

どうしようかと悩んでいるとミサカのすぐ側の電灯の存在に気がつきました

近寄って触れてみると電灯の強度は大したことはないようです

彼が後ろを向いている隙に能力を最大限に使用し、ミサカは電灯を支える下部を熱で弱めました

ある程度弱めると電灯から距離を取ります

…振り下ろされるのはこの位置で間違いないようです

弱くなった下部では重量のある上部を支えることは出来ません

従って……

「っ！？危ねえっ！！」

ミサカに向かって鎚の様に電灯が振り下ろされます

「間に合えええええ！！！」

ミサカは後ろに飛びました。途端に彼の顔が驚愕に染まります

もちろん電灯は止まりません

「少しの間です。我慢してくださいね？」とミサカは堪えきれず笑みをこぼします」

グシャツという気味の悪い音とともに彼の頭部は半分ほど潰れてしまいました

脳が飛び散る様はまるで……

やめましょう流石のミサカでも吐き気がしてきました

「彼を……彼を助けてください……とミサカは……ミサカはっ……」

「……安心したまえ。君はボクを誰だと思っているんだ？」

「任せておけばいい。彼の命は絶対に助けてみせる」

アハッ

め・い・え・ん・ぎ

ミサカは自分のうちに秘めた女優の才能に身震いしてしまいます…

とりあえずこれで彼が死ぬことはありません

そして私は次のステップへと進みます…

「…命はつなぎ止めたし、頭部や潰れた部分も外見は元通りの状態まで回復させておいた。だが……」

「脳の損傷が酷くてね…彼は話すことはおろか考えることすら出来なくなってしまった……」

「……ここまで計画通りに運ぶとはミサカは策士の才まであるのではないだろうか」

さて……

「彼を救う方法としては……」

「一方通行……一方通行の時同様にミサカネットワークが代理演算を行うことは出来ないのでしょうか！？」とミサカは提案します！」

「…ああ。彼を助ける術はもうそれ以外にはないだろう。早速ボクは準備にとりかかる」

「ミサカ、今日はどこに行くんだ？」

「当麻とならどこでも構わないよとミサカは猫なで声でたつぷりと甘えます」

数日後、無事退院した彼の首にはチョーカーが付けられています

一方通行の物と違うのは能力使用モードがないということだけ

現在の彼の思考はミサカネットワークにより補助、及び修正されています

彼の思考はより正しく、より良いものになるのです

「当麻…ミサカは頬を染めつつ目を閉じます」

「ミサカ……」

「アッ、アンタ達！白昼堂々何やってんのよ!？」

お姉さま…ちょうどいい。ここで格の違いを見せつけておきましょう

ミサカと彼がどんな関係なのかという報告を兼ねて

「愛しい恋人とデート中の真っ最中ですよミサカはお姉さまに現状を報告します」

「デート？……って恋人お！？」

…まったく。予想通りの反応ですね

つまらない。止めをさしておきましょう。もはや彼はミサカのものです！

「それでは失礼しますとミサカは恋人との腕組みを見せつけながら別れを告げます」

「……ちよつと…待つてよ……アンタそれって…」

お姉さまの視線はミサカの左手に、正確には左手の薬指に集中しているようです

「俺がミサカに送ったんだ。恋人だし……将来的にはって考えてる」

「へっ、へえ…そ、そうなんだ…おめで…とう……」

「お前も招待してやるよ。じゃあな」

……勝った

お姉さまの今にも泣き出しそうなこの表情は正直ゾクゾクしています

彼から貰ったこの指輪、陽の光でキラリと光って綺麗ではないですか？お姉さま…？

ひぐらしのなく頃に 路外し編（前書き）

いろいろ問題は山積みなわけですが……
頑張って生きていきます（＾ω＾；）

ひぐらしのなく頃に 路外し編

始めに言っておくと、私はこの世界をやり直すつもりでいる

カケラ

理由は単純明快、この世界で生きる意味がなくなったからだ

自ら命を絶つことに何の躊躇いもないほど私にとってこの世界は意味のないものなのだから……

だが死ぬ前に話しておこう

この世界で起こった異質な出来事を……

一人の少女がその愛ゆえに起こした新たな惨劇の物語を……

「圭一くん！こつちだよ！早く早く！」

少女の名前は竜宮礼奈…… 竜宮レナ

圭一に言わせると最も女の子らしい女の子

からかい甲斐があつてつい困らせたくなくてしまふのだという

そして最も特筆すべきなのが可愛いものが好きということだ

「はううゝこのくまさんのぬいぐるみとってもかあいいうゝ……」

「お持ちかえりいいい！……！」

可愛いものを目にとると理性をしばしば失うこともあり、暴走すること多々ある

「どうしてその汚れてるわボロボロだわなくまが可愛いのか未だに理解できないぜ……」

「はうう……圭くんが冷たいよう……」

うるうると目を潤ませ、上目づかいで圭一に視線をくれるレナ

「……ッッ!？」

そしてその視線にノックアウト寸前になる少年

『前原圭一』

「と、ともかく!宝探しは続けるんだろ?手伝うよ」

レナの宝探しはゴミ山、不法投棄によって山積した多種多様なゴミによって形成された場所で行われている

昔あった事件ゆえに近づく村人が少ないこの場所は今やこの二人くらしいものであった

今思えばこの二人を必要以上に一緒にいさせすぎたのかもしれない

……

ああ……今になって後悔の念が押し寄せてきた……

私をもっと圭一に気を払っていれば……

圭一のいない世界なんて……私には何の意味もない……

それからは何の変哲もない平穏な日々が過ぎていた

だけどそれは仮初の平穏

平穏ながらも事態は、レナは刻々と変わっていったのだ

「昨日も見つからなかったんだって？」

「そうなんだよ。レナとここんとこ毎日宝探ししてるんだけどさ…

…」

「かぁいいもの……はうう……」

圭一曰く以前ならば反応していたであろうものにも反応しないのだという

まあ、私にはレナにとって何がかわいくて可愛くないのかなんて理解するつもりすらなかったのだけれど…

……これが前兆だったのだろう

レナはあるものが欲しくなったのだ

それ以外には何もいらないうるほどに……

「圭ちゃん、今日も行くの?」

「ああ。レナが元気ないと調子狂うしな」

「そんなこと言ってレナさんと二人きりになりたいだけではありませんの?」

「圭一さんと二人つきり……はうう……」

私が愚かだった

レナの異変に気づきかけていたのに

レナにとっては宝探しをすることに意味があつたのに……

レナと圭一を二人きりに……させてはいけなかったのに……

「どうだ？あつたか？」

「ううん……ない……」

「そうか……おっ！あれケンタ君人形のクリスマスバージョンじゃないか！？」

「レナ、鉦とつてくれよ！俺がケンタ君人形を救出してきてやる！」

意気揚々とケンタ君人形を見つめる圭一は見えていなかった

自分の背後でレナが何かに気づいた表情をしていることに……

私は弱い

この時私は物陰に身を潜めていたのに……

出ようと思えば出られたのに……

私は…… 見ているだけだった……

「……圭一くん」

私ね分かったんだよ。とレナは小さく呟いて圭一に抱きついた

自分の後ろから抱きつく少女に圭一も最初こそ戸惑っていたものの、
もはや吹っ切れたと言わんばかりにその場に座り込んだ

「少しの間だけでいいから……こうしていたいかな……かな……」

「……分かったよ」

彼女は私と同じなのだろう

私と同じく圭一を愛している

そしてそのことになった今、気が付いたのだ

圭一の広く逞しい背中に抱きつくレナは幸せそうだった
私はそんなレナの行動に自分を投影して悦に浸っていた
その時間がどのくらいだったのかはわからない
そうだ……圭一は？レナは！？

……時すでに遅し、迂闊だった……油断したッ……！！

見えた光景は圭一の腕が無残にも切り落とされるところだった……

「がっ……があああああ……！！！！！！！！」

「圭一さんの右腕……とってもかぁいい……」

「レ……レナぁ……おま……え……」

レナの腕が振り下ろされるたびに抵抗することも出来ず、圭一は小

さく引き裂かれていった

圭一が人の形を失っていく……

レナは小さくなった圭一を愛おしそうに抱えると、持参していた力バンに詰め

「おっ持ちかえりいい！！！」

高らかに叫んだ

私は既視感を感じていた。これは再現のようだなと思い、

自然と笑みを零してしまっていた

バラバラ殺人はこの世界でも起こったのだ……

私たちの友人、仲間とも言うべき少女は壊れた

少女が壊れた理由は愛、一人の少年への愛

レナは圭一への愛に気付いたがゆえに壊れてしまった……

そしてその少女によって私の愛していた少年は壊され……奪われた

レナは大切な仲間だ。だが許されないことをしてしまった

私の愛する圭一を奪ったのだから……

ここまでが語るも腹立たしいレナと圭一の物語

ここから先はどうなろうと私の知るところではない

どうしてこうなったのか……このカケラで……

この世界で私は圭一と結ばれるはずだったのに……

圭一を誰よりも愛しているのはこの私なのだから

……許せない。どうして私の邪魔をするのか……

次の世界ではこうはいかないから

レナが壊れるなら、壊れる前に私が壊してやる……

魅音も沙都子であろうとも私を阻むなら容赦はしない……

次の世界では絶対に私が……

……さあ、こんな間違った世界にもう用はない

羽入、私を次の世界に導いて!!

苦しみはあまりなかった

おそらく私の中の圭一への愛が私を駆り立てているからだろう

次の……せ……かい……

「梨花……貴女も私の愛を阻むなら……」

「容赦はしませんよ……？ふふっ……」

演劇部の少女編

岡崎渚、俺の最愛の妻である

そして今、彼女は母になる

名前は既に決めてある

名前は「汐」^{うしお} 岡崎汐だ

そんな俺たちの出会いはとても不思議なものであったが、それはまたの機会に

目が離せなくて、見てると思わず手伝ってやりたくなってしまっ少女

それが渚だった

でも一緒にいて楽しかったのは事実で、

気づけば俺は渚に惹かれていていた

出会いのことを考えれば俺たちが結婚することになるとは思いもしなかった

しかし俺たちは結婚した

今から語るのはそんな渚と結婚しようと思った日の話

退屈になるかもしれんが、暇なら付き合ってくれ……

渚は演劇部で部長をしていた

俺はその演劇部を手伝ってやることになったんだ

部員集めや文化祭での講演、初めはそれらを手伝ってやるだけのつもりだった

あくまで部外者として……

しかし俺は部員になった

今思えば渚に心惹かれ、少しでも一緒にいたいと思っていたのかも
しれないな

閑話休題。話を戻そう

ある日、俺たちは渚の演技の勉強のために映画を見ることになった

選んだのは杏、恋愛映画だと言っていたが……

俺にはそうは思えなかった

タイトルは覚えていないが、内容は忘れたくても……

忘れられない……

簡潔に話すと

一人の少女が恋をしていた

だが、少女の恋した相手にはすでに恋人がおり、

その恋は儚く散ってしまう……かに思えた

しかし少女は諦めなかった

少年を自分のものにしようとする手を尽くした

少年の彼女に対して陰湿な嫌がらせやいじめを繰り返す

最後には……自殺させてしまったのだ

もちろん彼女を殺されてしまったのだから

少年は怒り狂い、少女に対して激しい憎悪を向けた

だが、それこそが少女の狙い

どんな形であれ、少女は少年と関わる事が出来ている

だから少女は幸せだった

少年からの誹謗中傷は少女にとっては愛の言葉で

少年からのいじめは愛撫でしかない

少女は幸せだと言っていた

愛する人と関係を持ち続けていられるのだから……

「朋也君、この人は本当に幸せだったんでしょうか？」

渚は再生が終ったDVDをプレイヤーから取り出しながら聞いた

その問いの答えは俺には分からなかった……

「さあな、自分で幸せって言ってるんだからそうなんじゃないのか？」

その答えに渚は不満そうに声を漏らす

「私にはそうは思えないんです。だって……」

「だって？」

「好きな人には自分を好きになって欲しいじゃないですか……」

渚の絞り出すような言葉には妙な説得力があった

「朋也君は……私のこと好きですか……？」

数日前の部室で告白し、俺と渚は恋人同士になっていた

それなりに渚が好きだったし、だからこそ付き合っていたはずだが、この時俺は答えに躊躇した

渚から今までに感じたことのないものを感じたからだ……

「……ああ、もちろんだ」

「そう……ですか……」

「渚？」

一瞬、渚の顔に奇妙な笑顔が貼りついていった気がした

背筋が凍りそうな気味の悪さに加えて普段の渚との違いに……

俺は恐怖を感じていた

「私は朋也君が好きです。たぶん誰よりも……」

「だから朋也君にも私を想って欲しいんです……」

「朋也君は……私のことどう思ってますか？」

俺は渚が好き……なはずだ

だが声が出てこない

まるで言葉が意志を持っていて喉から出ることを拒んでいるように

……

「お、俺は……」

「……やっぱりそうなんですネ」

渚はとても哀しそうな表情を見せた

何かかもが終ってしまったかのように暗いその顔は……

「私、思っています。大好きな人に好きと言って貰うこともできない人生なんて……」

「何の意味もないんじゃないかって」

次の瞬間、目の前で人が倒れ、カランと金属音が部屋に響く

自分自身の手首を切り裂き、大量の血を滴らせ、渚は泣いていた

「渚ッ!」

駆け寄ってその小さな体を抱きかかえると震えているのがわかった

「お前……どうしてこんなことを……」

その問いかけに渚は今にも消えてしまいそうなほど弱弱しい声を出した

「言ったじゃないですか……好きな人に好きと言って貰えない人生なんて……」

「価値がないんですよ……」

「……ッ!」

「……俺のせいなのか!」

俺が渚に好きと言えなかったからこんなことに!?

「待ってる!!今救急車を呼んでやる!!」

携帯を手を取った俺の手をつかむ手があった

「……渚？」

「だめですよ朋也君、私はこのまま……」

「死にたいんですから」

結局渚の手を払い、俺は救急車を呼んだ

どうにか渚は一命を取り留めたが……

渚はその日から人形になった

一見何事もなかったかのように振る舞っているが、感情を表に出さず

自分からは何も話さないし、ほぼ自らの意志で行動しない

まるで誰かに操られている操り人形のように

そして唯一自らが望んで行動するのが……

自殺を……はかるときである

「やっぱりここにいたんだな」

渚はふといなくなる時があり、その場合屋上に居ることが多い

フェンスを越えた先でぼうつと空を眺めているのだ

「……どうして？」

久しぶりに渚の本当の言葉を聞いた気がした

「どうして……か」

「私は……死にたいんですよ……？」

「朋也君に愛して貰えないなら生きる意味なんてないんですっ……！」

とても強い口調だった

心の底からそう願っているのだとはつきり分かった

俺は……それでも俺は渚を死なせたくない

「愛してるぞ」

「えっ……?」

「俺はお前が好きなんだよ。渚……」

「あの時俺は心の底からお前を失いたくないって思ったんだ」

俺はフェンスを乗り越えて渚を抱きしめた

「……朋也君、キスしてくれませんか?」

俺は渚に応えた

その一瞬が永遠のように長く感じた

この感覚をずっと味わいたいと思った

「……渚、俺の傍にいろ。もう俺から離れるな」

「……はい」

このとき何かが俺の中で弾けてしまったのだ

渚と繋いだ手をより強く握り、一步前へ踏み出してしまった

空中に投げ出された俺と渚に恐怖心はなかったように思う

そして俺はこの時になってようやく渚の言葉に共感した

好きな奴と一緒にいられる

永遠と一緒にいられる

これはとても幸せだ……

結局のところ花壇に落ちたために打撲程度で済み、俺たちは死ななかつた

俺の想いが変わることはなく俺たちは結婚した

結婚のきっかけはここで語るつもりはない

正直あまり恰好のいい話ではないからな……

俺は渚と汐、二人を絶対に幸せにしてみせる

ひぐらしになく頃に 叩潰し編（前書き）

今更ながら自分には語彙力がないなあ…なんて思ってみたり

西尾先生くらい言葉遊びが出来るくらいになりたいww

ひぐらしになく頃に 叩潰し編

どのくらい眠っていたのだろうか……

それに、ここはどこなのだろう？

眼前の景色に見覚えがないのは未だ俺の脳が覚醒しきっていないからだと信じたい

知っているような気もするのだけれど、確実に雛見沢ではないように思えた

つい先ほど、ほんの数分前に俺は目を覚まして約束の場所に向かった

通いなれた道の先にあるはずのその場所、でもそこには……地獄が広がっていた。

もちろん俺は実際に地獄に行ったこともなければ、見たこともないだが、ここは地獄だといえる。少なくとも俺はそれ以外にこの目の前の惨状を言葉に表すことはできない

俺はそれを受け入れることができないまま、急ぎ足で彼女のもとへ向かった

……胸騒ぎがする

彼女が悲しんでいる気がする

何か、大切な何かを無くして悲しんでいるような……

そんな嫌な予感が治まるどころか次第に大きくなって俺を包んでいく

待っていてくれ……レナ

恐らく定刻通り、その場に未だレナの姿はなく、代わりと言っては何だが誰か人が倒れていた

遠目からでは分からなかったが、近づけば近づくほど違和感に気づく

その人の周囲に、体に何かが蠢いている……

……蛆？

その人が既に死んでいることが今更になって分かった

その人が……誰なのかも

「レ……ナ……？」

だが、受け入れられるわけがなかった

昨日まで元気だった。

罰ゲームでその顔を真っ赤にして恥じらっていた。

学校が休みの今日は宝探しに行こうと約束していた……

俺が好きだった少女がそこで死んでいた。

「うあああああああああああああああああああああああ
あああああつつ！！！！」

不快感を抑えきれなくなり、俺はその場に嘔吐してしまった

脳裏にレナのその姿が、無惨な姿が焼き付いて離れない……

魅音、詩音、沙都子、梨花ちゃん、羽入

誰でもいい、

誰か助けてくれ……

この悪夢から俺を救い出してくれええ……

その場から、その光景から、その現実から逃げ出した

その道中でたくさんの死体を見た

胴体が三つに裂けた監督、
腕と首の千切れた鷹野さん、
もはや血にまみれた肉と化した村の人々……

もう口からは空気が漏れるだけだ……

——昨日まではここに校舎があった

だがそこには瓦礫と死体の山があるだけになっていた。

辺りを見渡したところで死体が転がり山を成しているだけで特に何もない。

俺の感覚も麻痺し始めている……

死体を見ても、もう何も感じない。感じられない……

俺ももうすぐ……こうなるのだからどこかそう考えているからかもしれない

校庭を少し進んだところでひときわ目を引く死体があった

恐らくこれは沙都子だったのだろう……

所々が拉げ、抉れ、欠落している。

赤と黒の入り混じる池に沈む沙都子を見るに堪えない……

もはや、これがあの沙都子だというには少し心が痛んだことだろう

でも、今の俺には……

ふと気が付いた

俺はまだ涙を流していない

何故泣けないのか？

悲しい。とてつもなく

だが泣けない。

俺はもう壊れてしまっているのだろうか……？

——魅音の家、園崎家に見えた二つの人影には見覚えがあった

「梨花ちゃんと羽入……なのか？」

俺の声に二人はほぼ同時に振り向き、薄気味悪い笑みを浮かべて口

を開く

「おはよう圭一、もう少しだけ待っていて……あと一人で終わるか
ら」

「圭一、おはようなのですよ　梨花を殺し終わるまでもう少しだけ待っていて欲しいのです」

そう言っただけで二人は殺し合う

殺しあう？　コロシアツテイル？

梨花ちゃんは包丁を鋭く振りかざし、羽入はそれをかわしながら金槌のようなものを振るう

虚ろだった俺の意識が徐々に覚醒する

「や、やめろよ二人とも！！　一体何がどうなってるんだ！？」

「圭一？」

俺の声に反応した梨花ちゃんの回避行動が一瞬遅れる

「梨花ああああ！！！！　終われええええ！！！！」

鈍く低い音が俺の耳に届く

すごく不快で背筋どころか全身に悪寒が走る

羽入の一撃は梨花ちゃんの前頭部を捉え、陥没させた

血が止めどなく溢れ出し、見れば梨花ちゃんの右目は潰れている

見ている俺ですら悲鳴を上げてしまった
どうも言葉に表せそうもない衝撃だ……

……が、彼女は悲鳴すら上げない

それどころか己の血を一舐めすると

「アンタは甘いのよ……羽入」

そう冷たく言い放った梨花ちゃんが嘲笑する

「今までよく働いてくれたわ、感謝してる」

だから……と続ける梨花ちゃんの後ろで羽入が呻くように悲鳴を上げた

「アンタの両手で許してあげる」

直後、ボトリと二つ音がして羽入が泣き叫ぶ

肩から先が消失していた

元よりそこには何もなかったかのように平らになっていた

滝のように血は流れ出し、まもなく絶命するのは明らかだ……

「ああああああああ……」

「貴女が私と同じ舞台上に上がったのが敗因よ。神を捨て、人に堕ちた」

「さようなら羽入」

梨花ちゃんは羽入に背を向け俺の方に歩み寄る

その途中で転がる羽入の腕を踏みつぶしても満面の笑みを変えない

それは先ほどまで死闘を演じていた少女ではなかった

「お待たせなのです。けーいち」

口調も俺の知っているもの……

だがこの鼻を突く血の臭いに包まれた少女は酷く不気味で、恐ろしくて、キモチワルイ……

梨花ちゃんが血に染まった。

梨花ちゃんの頭に血が垂れ落ちていく、
どこから流れているのカナ……？

梨花ちゃん表情が恐怖で曇るのが見えた

彼女の手からは先ほどまで握られていた獲物がなくなって……？
い……る……？

安堵からなのか、俺はようやく涙を流した……

「圭………？ どうして自分の首を………？」

その少女。古手梨花は一瞬驚きこそしたが、冷静さを保っていた
自分の村の人間をその手で根絶やしにしたことでさえも少女にとっ
ては取るに足らない行為

邪魔だったから殺した

たまたまその対象が周囲の人間だっただけ

その深い愛故に、彼の愛を、彼自身を我が物にするために少女は頑張った

ひたすらに、我武者羅に、必死に……
ただ……頑張っただけ

結果、愛する彼は死んだ。
自ら死を選んだ。

この方法では彼を我が物にすることはできなかった……

「……羽入、移動よ。早くして」

いつものように欠片を移動すべく、声を上げる少女

「羽入？ 聞いているの？ 早くしなさい！！」

しかし反応はなく、羽入の声はおろか人の声すらしない

そこまで口にして少女は気づく、そこで息絶えているのは誰か？

少女自身が手につけたその元神の人間は……？

「……羽入ッッ！！！」

ようやく少女に絶望がやってきた

残されたのは彼女唯一人、他には誰一人として生きてはいないこの
雛見沢村で古手梨花は佇む

[illegible]

程なくして、雛見沢からは人間が消え去った。

ただ変わらずにひぐらしだけがその声を響かせ、己が生を高らかに謳っていた

籠球部1（前書き）

うまく考えをまとめられないといいますが、
いくらかアイデアがあるのに書けないジレンマ……

籠球部 1

6月、季節は梅雨にもかかわらず今日の空は快晴

絶好のバスケット日和……と言いたいところだが、如何せん屋内スポーツであるバスケットボールは天候にさして左右されたりしない

今日も俺はこの慧心学園に足を運んでいた

これまでと変わりなく、彼女らにバスケットを教えるために……

その異変は頭よりも先に体を感じ取った。感じざるを得なかった

「すばるん？どうかした？」

カチャリと音を立てて手首が重量を増し、その自由が奪われる

これは……手錠……なのか？

『手錠』拘束具の一つだと俺は認識しているが……

何で手錠なんだ？

どうして俺の手に？

そもそもどうして真帆が俺に手錠をかけたんだよっ！？

「ま、真帆……これはどういっ……」

俺の問いに対して、いつの間にか背後に立っていた真帆はいつもと変わらず、無邪気な微笑みを浮かべてから答えてくれた

「ん？ 欲しいなあ〜って思ったから」

その言葉の意味は理解はできなかったが、

ひとつ確実なのは真帆がおかしくなっていて俺は危険な状況にあるということだ……

「んー？ ほらアタシってさ、すばるんのこと大好きじゃんか」

「すばるんゲットだぜ！」

油断していた。というのもいささか不自然ではある

俺はこの場所に、真帆に対して警戒心なんてものは微塵も持ち合わせていなかったのだから

「えへへ、すっぱる〜ん」

猫なで声という言葉意外に今の真帆の声を表す単語はないだろう

不覚にも言うべきなのか、今の真帆は愛でたくなる様な可愛さがある（動物的な可愛さである。俺はノーマルだ！）

「なあ真帆？冗談はこのくらいにしてそろそろコレ外してほしいんだけど……」

辺りには他のメンバーも見あらず、時間だけが過ぎていった

30分くらい経っただろうか、俺は意を決して言った

それが今の真帆にどんな効果があるかも深く考えずに

「なあ真帆、そろそろ離れてくれないか？あと他のみんなは……」

最後まで言い切ることは出来なかった

真帆はおもむろにリモコンを取り出してスイッチらしきものを押す

瞬間、俺の手に激しい痛みが襲いかかる

それは何か？ 無論

……電流だ

「ぐうつ……ああああああっ」

我ながら情けない声が出てしまったと思う。だが耐えきれるようなものではなかったとご理解頂きたい

そもそも人体は高圧電流を受けてなお、平気でいられるように出来ているとは思えない

「ま、真帆なにをッ……？」

声を振り絞り、問いかけてみると真帆は涙を流していた。そして震える声で、訴えかけるように俺に言葉を放つ

「どうしてさ？どうして他のみんななんていうんだよっ！！」

「アタシと一緒に楽しくないのかよっ！！」

「アタシと一緒にの時くらいアタシのことだけ考えてくれてもいいじゃないかっ！！」

感じたこともないような狂気を真帆から感じた……

鬼気迫る表情で俺に迫る真帆に恐怖した。小学生に、俺は恐怖している……

「アタシはさ、すばるんが大好きだよ？」

「望むなら何だって揃えてあげるよ？ 何ならアタシのすべてをあげたっていい……」

「だから……さ……」

「アタシのものになれよおおお！！！！！！！！」

真帆は再びスイッチを押そうとリモコンに手にかかる

どうしようもない恐怖に身を震わせて俺は再び目を閉じてしまった

「うあああああ！！痛いつ！！痛い！！！！！！」

その代わりというのが正しいとも思えないが、少女の叫び声が響きこめかみを押さえて悶え苦しんでいた

「長谷川さん、大丈夫でしたか!？」

「紗希！」

そこに立っていたのは真帆と同じく俺の教え子である長塚紗希だった

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2339/>

いろいろなお話を壊してみた

2011年11月13日19時44分発行